
かなるえんかうんたー

みっき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かなるえんかうんたー

【Nコード】

N4275I

【作者名】

みつき

【あらすじ】

深夜不定期更新

「もう少し調べてみる必要がありそうね・・・」

久しぶりに再会した幼馴染は相変わらずの推理オタクだった。

高校進学に伴いバラ色のスクールライフを夢見て、幼少期を過ごした街へと帰ってきた幸太郎。

電波障害娘、七瀬さん。

ぐるぐる包帯フェチ少女、咲坂さん。

推理オタクの幼馴染、加奈琉。

様々な出会いの中で幸太郎は高校生活をバラ色に染め上げることができるのか!?

感想等お待ちしております) * . (* | | () ペロ

scene 1 - 1 懐かしきかな新天地

ひどい揺れだった（結果的に）。

そのおかげで目的地に着く頃には日も傾きはじめていた。

今日から始まる新生活。

俺はそれなりに期待に胸を躍らせたりしていたわけで、要するにあれだ、昨夜はあまり眠れなかった。

それも手伝ってか、心地よい電車の揺れが俺をまどろみの中へと誘うのは容易なことだった。

出端をくじかれたというか自らくじいた感はあるが、気を取り直して出発点の再設定。

こっそり心の中で宣言し呼び鈴を押した。

とりたてて記することもないごく普通の家。

ただ、こまめに整理されている花壇の色とりどりの花々が家主の性格をあらわしているような気がした。

「はぁーい」

中から甘ったるい返事と共に出てきたのは俺の母の親友である遥ほのかさん。

色白の肌、髪はセミロングで後ろをくくってまとめている。

最後に顔をあわせたのは10年近く前のことだろうか、何というか・
全く変わってないよな！。

「もー、遅かったから心配しちゃった。さあ入って入って！」

満面の笑みで俺の手を握り、家の中へと引っ張る。

玄関から見た風景も思い出の中のものそのままだ。

「あ、今日からよろしくお願いします」

しばらくお世話になる身だ、礼儀として頭を垂れる。ペー。

「まあそんなにかたくならないで、今日から家族のようなものなんだから」

そういつと遙さんは俺をあたたかく迎え入れてくれた。

こういつ相手に気を使わせない態度を自然にとることができるというも昔と変わっていないな。

それは俺にとつてすごく助かることだ。

「届いた荷物は2階の部屋に運んであるから、部屋は幸太郎君の好きに使う」

そう言われ、俺は2階へと上がった。

夢にまでみたひとり部屋。

大人への階段を上がっていく。

決して階段をかけた洒落ではないことをここに補足。

部屋はきれいに片付けられていて、隅にダンボールの箱がいくつか積み上げられていた。

俺が実家から送っておいたものだ。

さて、これからどう俺色に染め上げてやるつか、ふひひ。

という考えはいったんどこかに預け、ベッドへと身を投げ出した。

scene 1 - 2 記憶の中の女の子

気がつくとしばらく眠っていたようだった。

ズボンから携帯を取り出して時間を確認し、体を起こす。

んーっ。

外から入る光は完全に途絶え、部屋の中は真っ暗になっていた。

無音の室内、まだ頭がぼーっとしている。

ん？下で遙さんが誰かと話している、誰だろ？

しばらくして会話が聞こえなくなったかと思うと、今度は階段を物凄いい勢いで駆け上がってくる音が聞こえ、俺のいる部屋のドアをノックもなしに開放する。

ひょこつと顔を出し覗き込んできたこやつは……。

寝ぼけ眼をこする。

そいつは部屋の電気をつけるとこちらへ近づいてきた。

蛍光灯の光に目を細める。

「コウちゃん久しぶりー」

次の瞬間、ダイビングヘッドバツド的なそれをちよっだいする俺。
星のついた浮かれたセリフに俺の頭は星を飛ばし律儀に返事をした
模様。

「いてて・・・」

頭をさすりながら苦笑いをする侵略者。

どっちら、俺のバツグにつまずいてこけたらしい。

もちろん俺は頭を押さえて絶賛悶絶中！

・・・。。。

しばらくしてようやく痛みから解放され、元凶の姿を確認する。

そこには俺と年のかわらないであろう女の子がぺたんと座り込んで
いた。

俺、回想中。しばらくお待ちください。

「久しぶりって言った？」

目の前にいるのは見たことのない女の子。

左の眉毛がピクリと反応する。

俺の第一声により機嫌マイナス1。

俺、思考中。しばらくおまちください。

ひとつひとつ記憶の引き出しを開けていく。

お？隊長！鍵のかかったそれらしき引き出しを発見しました！

「か……」

目の前の女の子から1つ目の鍵が渡される。

か、か、か……だめだ、記憶のサルベージをかたくなに断られる。

「な……」

続けて2つ目の鍵が差し出された。

な、な、な……ガチャ、隊長、やりました！

「……る？」

俺の問いに目の前の女の子は大きく頷いた。

どうして忘れていたのだろう。

いや、忘れていたんじゃない、記憶の中の少女と目の前の女の子がリンクしなかったのだ。

月城加奈琉つきしろかなる、彼女とは幼少期を共に過ごした仲で、昔はよく一緒に

遊んだものだ。

だけど、目の前にいるこいつは・・・

「コウちゃん全然変わってないね」

「お前は変わりすぎだ」

主に容姿、花丸だ（俺査定）。

俺の記憶では男か女かも曖昧だったのだが、月日の流れとは恐ろしい。

流れるように肩より少し長く伸びた黒髪はその色をただ単に黒と表現してしまうのがためらわれるほどに綺麗で、俺の鼓動を加速させる。

この部屋の照明に何か仕掛けがあるのではないだろうかという疑ってしまう。

が、もちろんそんなことはなく、ただいま美少女絶賛光臨中なのである。

なんか後光みたいの差してない？

いや、これはおいらの寝ぼけたおめめが原因か、てへ

一直線にこちらを見つめる瞳に俺は思わず目をそらした。

だってさ、美少女と3秒間目をあわせると魂を持っていかれるって
おばあちゃんが言ってたし。

だが、これではいかにも負けたような気がするので視線を戻す。

それは直線で絡み合い血脈が高騰するのがわかる。

いや、これは錯覚だ！

俺は幼馴染という属性に対し異様な興奮を覚えるなんていう一部の
限られた人たちしか持つことを許されない特殊スキルは持ち合わせ
ていなかったはず。

「とりあえず・・・久しぶり」

「うん！」

母親譲りの驚異的な殺人スマイルに再び目をそらしてしまったのは、
俺の防衛本能が危険を感じ取ったということにしておく。

「夕飯できたって、行こっ！」

そうやって俺の腕を掴み引っ張っていく加奈琉さんの中身は幼い頃
の記憶の中にいる女の子とほとんど変わっていないのでしたとさ、
まる。

scene 1 - 3 幼馴染は推理好き

夕食を食べ終えた俺は部屋へと戻った。

夕食のシーンについては俺の恥ずかしい過去話に花が咲くどころではとどまらず、大輪を打ち上げられていたので割愛させていただく。ひとつ驚いたのは遙さんが料理上手であったこと。

こんな料理を毎日食べられるなんて加奈琉はなんて幸せな子なんだと思ったのだけれど、今日は俺が来るということのでわざわざ仕事を休んでくれていたらしく、普段は帰りが遅いらしい。

思えば女手ひとつで娘を育てているのだから無理もないか。

それにしても加奈琉の成長っぷりには驚いたなあ・・・あ、外見ね。

さてさて、ふむむ・・・。

昔の人は言いました、目標が高すぎると人間うまく動けないものだと。

おわかりいただけるだろうか、このダンボールの山。

ダンボールの山と向かい合い座禅を組むの図。

今からこれを全て整理するのは不可能！とりあえずすぐ使いそうなものだけ選りすぐってダンボール箱から取り出していく。

しばらく作業に没頭しているとドアをノックする音がして加奈琉が覗き込んできた。

「作業は進んだるかね？幸太郎くん」

「ぼちぼちですなあ、手伝ってくれるのけ？」

「まあそれはおいといてー」

「でいすいずあ放置ぶれい！」

「明日はどーやって学校いくんさ？」

あーそうか、あの場所まで歩いて通うには距離があるよな。

これから通う高校について場所は確認済みだが、朝から歩いて通学するにはなんと微妙な距離なのである。

「うーん、加奈琉は人力二輪車？」

「ほやほや、人力一輪車ならあるけど使う？」

さわやかな朝の風景に水を差すようなそんな愉快の度を越えた登校はしたくない。

「明日はとりあえず徒歩で行って、帰りに自転車屋でものぞいてくるよ」

「そかそか・・・もしうちの子の動力となってくれるのであれば明日は一緒に登校してあげてもいいける?」

.....。

これはもしかや青春の1ページを飾るにふさわしい朝の二人乗り通学(相手は異性に限る)へのお誘いか!?

でも相手が幼馴染じゃなあ.....。

いや、せつかくのお誘いだ。

それで俺の時間と体力を省エネできるならば喜んでその動力と化そうじゃないか。

「いえっさー!」

「あう、君を我が部隊の動力隊長に任命する!」

動力隊長ってなんぞ?

ビシッと敬礼をする加奈琉。

「明日は寝坊しないようにねー」

「あ、荷物整理は手伝ってくんねーの?」

「ごめんねー、天才推理少年如月くんが呼んでるの。そいじゃー!」

如月くん?あー、あれか。

毎週この時間に放送されている探偵もののドラマ。

主演は最近活躍の場を広げてきた注目の若手俳優きんからぬしのぶ如月忍が役名そのまま演じている、毎回様々な有名人がゲストで出演し犯人役を演じるのだが、そこが視聴者につけているらしい。

俺としては、最初から犯人がわかってしまっていることにどうも物足りなさを感じるのだが。

それにしてもあいかわらずだな、加奈琉の推理オタクっぷりは。

小さい頃から謎解きが好きだった加奈琉。

この手のドラマや推理小説が大好きで、幼い頃、探偵ごっこに付き合わされる俺の役割はもっぱらミステリーを仕掛ける犯人役だった。

簡単すぎず、かつ加奈琉にでも解くことができるようなミステリーを提供していた（させられていた？）俺。

なんという接待犯罪！

今思い返せばセピア色でよみがえる微笑ましい記憶。

再会した加奈琉は見た目はともかく中身は記憶の中の少女と変わっていないように感じた。

そのことに俺は少なからず安堵感のようなものを抱いている。

なんだろうこの感じ……。

ってか、なんだこれ？

ダンボールの中から1枚の写真を取り出す。

こんなの入れた記憶ないけど……。

そこに写っていたのは幼き日の俺と加奈琉、そして……。

「……誰だろうこの子？」

scene 1 - 4 友達100人できるかな？

そこへ俺の携帯の着信音が鳴り響いた。

手にしていた写真を元へ戻し、時間を確認する。

時刻は11時半をまわっている。

こんな時間に誰だろう？

と一瞬考えたが、すぐにひとりの人物が頭をよぎる。

「・・・は、はい」

電話にでると予想通りの言葉が返ってきた。

「ちよつとお兄ちゃん！？着いたら連絡してって言ったじゃん！」

第一声から怒鳴られ、右耳をやられた。

大丈夫、俺にはまだ左耳がある！

携帯を素早く持ちかえる。

「ああ、ごめん琴葉^{ことば}。いろいろ忙しくて・・・忘れてたんだ」

もうおわかりの通り俺の妹である。

年は3つはなれているのである。

今年中学校へ進学するのである。

こちらへの到着の報告を怠ったのである。

「忘れてたって・・・何かあったのかと思って心配してたのに」

本当に心配していてくれたらしく、最後のほうはトーンが下がっていた。

けなげで出来の良い妹をもったものだ、うんうん。

「悪かったね、無事着いたって母さんにも伝えておいて」

「お母さんが遙さんと電話してるの聞いて、お兄ちゃんが遙さん家に着いたんだって知ったのお！」

「そっか、というか琴葉も明日から学校なんだろう？」

「うん、そうだよー」

「じゃあ遅くまで起きてないで早く寝ないと間違えてランドセル背負って中学校の入学式いつちゃっぞぞ」

「お兄ちゃんじゃないから大丈夫だもん」

おい、いくら出来の良い妹だからって俺を出来の悪い兄みたいない方するとは・・・。

「それじゃ俺ももう寝るからおやすみな？」

「うん、わかったあ。また電話するね」

「はいよー、おやすみー」

相手が切るのを待つて電話を切る。

さて、明日の準備だけしてそろそろ寝よう。

寝坊なんてできない、加奈琉にも釘をさされているしね。

明日は高校の入学式。

これで晴れて俺も高校生というわけだ。

友達できるかなあ？とかクラスに馴染めるかなあ？とか通過儀礼としてほんのり考えてみたりして人生でたぶん一度しか経験できない高校生活に思いを馳せてみる。

俺がわざわざ実家を出てまでこの高校を選んだのも、このあたりでは1、2を争う進学校であり、ありがたいことに特待生として推薦をもらえたからだ。

じつは加奈琉が進学するのも同じ高校なのだが、こちらは少しわけが違ったりする。

加奈琉の通っていた中学校からはほぼエスカレーター式に多くの生徒が進学してくるのだそうだ。

それもそのはず、広大な敷地内に中等部・高等部といったように校舎が建てられているのだ。

加奈琉は中学校と変わらず家から近いという理由で進学を決めたらしい。

必死に受験勉強をした俺とは違い、通学距離で選んでこの学校に入る加奈琉の学力はどれほどのものなのだろうか。

バッグの中に必要なものを揃えた俺は、携帯のアラームをセットした。

ベッドにもぐり目をつむる。

夕食前に昼寝していたとか、慣れない枕だとかは小さなこと。

すぐに俺は寝息をたてていた。

scene 2 - 1 登校

俺は今、すがすがしい春の青空の下幼馴染の自転車をこいでいる。

まだ4月ということとで気温はそれほどでもないが、体を動かしているのと陽の光が暖かいのもあって吹き抜ける風が気持ちいい。

額にうつすらと汗もにじむくらいだ。

なんて爽やかな登校風景だろうか。

なのに泣きたくなるのはなぜだろう・・・。

この爽やかさ120パーセントの情景にマイナスの要素など・・・

暖かな春の陽気

心地よい風

登校初日の期待感

新しい制服

自転車という健康的な通学手段

隣を歩く幼馴染

荷台に積まれた謎のダンボール箱（重い）×2 ×

・・・あつた。

「あのー・・・ハア、ハア・・・話が違うんですけど、加奈琉さん隣を歩いている加奈琉に話しかける。」

というかまずこの次点でおかしい。

自転車に乗ってペダルを必死にこいでいる俺と新しい制服を清楚に着こなしてしなやかに歩いている加奈琉が同じ速度だなんて。

「話って?」

こちらを向いていたはずらっぽく微笑む加奈琉。

「こんなの・・・聞いて・・・ない」

自転車のバランスをとって前に進むだけで精一杯でまともに会話もできない。

「言ったじゃん“動力になって”って、それで一緒に登校してる」

たしかにそう言ったけど俺はこんなの想像していなかった。

俺はもっとこころ腰にまわされる細い腕とかを思い浮かべてたわけで。

こんなんじゃ青春の1ページなんて飾れやしない。

「もう少しなんだから頑張って」

くやしいことに加奈琉に言われるとペダルをこぐ足に力が入る。

美人って得だよなあってつくづく思う。

うまいこと駒にされてる俺も俺なんだけど。

「で、……中身……なんな……の？」

うっ……朝食食べたベーコンエッグがこんにちはしそっ……。

「うん、ちょっとね。部活で使うの」

ほー、加奈琉が部活に入っていたとは。

何だろう、走るの速かったから陸上部かな？

まあ、それも小学校以前の話だけど。

何をしているのか聞きたかったけど、とてもこれ以上言葉を発することのできる状況ではなかった。

scene 2 - 2 部室

俺たちが校門をくぐる頃にはすでに多くの人でにぎわっていた。

加奈琉に教えてもらった駐輪場に自転車を止め、ダンボール箱を下ろす。

「ねえこれどこ持ってくるの?」

「うん、部室があるからそこに」

ダンボール箱を重ねて持ち上げる。

「行く、場所教えて」

「え!?!いいよ、自分で運ぶし」

加奈琉は慌てて近づいてきて代わりにダンボール箱を持つとする。

俺だって男だ、これくらいひとりでも持てるぞ。

「大丈夫だよ、俺が・・・」

次の瞬間、抱えている箱の下で俺の手が加奈琉の手とふれ合った。

20センチほどしか離れない距離で加奈琉と目が合う。

どれくらいの時間だっただろうか。

とても長いようにも思えたし、ほんの一瞬だったかもしれない。

「う、ごめんね！」

加奈琉が急いで飛びのいたのをきっかけに俺は我にかえった。

「いや、別に・・・それより早く運んじゃおう」

「う、うん」

うつむいたままそう答えた加奈琉は部室に着くまでほとんど話さなかった。

右だったり左だったりりの最小限の道案内だけで、ずっと下を向きながら隣を歩いていった。

もしかしたら怒らせてしまったのだろうか。

自分が思っているよりも長い間加奈琉の瞳を凝視してしまっていたのかもしれない。

部室だということところにつくと加奈琉はバッグから鍵をとりだしてドアを開けた。

いくつも同じようなドアの部屋が連なっている、部室棟みたいなものかな？

部屋の中を見れば何の部なのか見当がつくと思っていたのだが、普通の休憩室のような感じで何の雰囲気もない。

言われるがままに部屋の隅に箱を置いて部室をあとにする。

「ありがとね」

いつの間にか機嫌を取り戻していた加奈琉にねぎらいの言葉をいだいた。

その笑顔と声を聞けるならいくらだって苦労を買い所存であります！

そんなことを思ったり思わなかったり。

「ところで、あそこって何部なの？」

自分のクラスを知るためにまずは掲示板を確認しに行かなければならない。

学校の敷地内に詳しい加奈琉について歩きながら尋ねる。

「えっとね、ミステリー研究部・・・かな」

ミステリ研とな、いかにも加奈琉らしいというか。

「といっても、部室でのんびりお話ししたりするのが主な活動内容かな」

えへへっとちよっぴり舌をだしておどけた加奈琉が人だかりを指差す。

「あそこだよ」

掲示板の前には俺たちと同じ新入生と思われる生徒たちが必死に自分の名前とクラスを探していた。

加奈琉と同じクラスになれるかな・・・。

実家から遠いこともあってうちの中学からここおまのみや天ノ宮高校へと進学してきたのは俺一人なのだ。

なれたらいいな。

なんて思ってる自分、恥ずかし過ぎてとても口にはだせない。

「コウちゃんと一緒のクラスだったらいいなあ」

なのにこういつ恥ずかしいことをさらっと言っちゃうのは反則だと思っ。

scene 2 - 3 未来

横に長く伸びた大きな掲示板にクラスと名前が書かれた紙が張り出されていた。

A「Jまでの10クラス。

まるで大学の合格発表のように人が群がっている。

「あ

近くまで行くと加奈琉が誰かに気づき声をかけた。

「みくー!」

すると、掲示板を見ていたひとりの女の子が声に気づいてこちらに歩いてきた。

その女の子は俺を見ると無表情でペコッと頭を下げた。

背は加奈琉より少し低いくらいで、セミロングの髪を両サイドで結んで短めのツインテールにしている。

腕も脚もすらっと細いが病弱キャラといった感じではない。

ないのだが・・・重傷キャラ？

まず一番に目がいつてしまうのはツインテールでも細い手脚でもな

い。

顔・手・脚と身体中いたる所にぐるぐると巻きつけられている包帯、包帯、包帯。

眼帯のように巻かれた包帯で片目は隠れ、左腕のひじから手首、左脚は膝の辺りまで、右脚にいたっては足首まで全部包帯でぐるぐる巻きにされている。

まるで大きな事故にでも巻き込まれた直後のような、しかしそれにしては普通に歩いていた。

「紹介するね、友達の咲坂未来ちゃん。で……幼馴染の小鳥幸太郎くん」

「ども、よろしく」

「……同じD組、よろしく」

「え、おれ？」

「みくと同じクラスだってさ、良かったじゃん！」

加奈琉が俺の背中をポンとたたく。

同じクラスに分けられていた俺の名前を覚えてた？

俺ってそんなに珍しい名前でもないよな……。

「で、わたしは？」

加奈琉が興味津々といった様子で尋ねる。

咲坂さんは少し迷った後、

「……かなるはとなりのクラスだった、C組」

と答えた。

「ガーン……」

物凄く分かりやすい効果音を自ら吐いてショックを受ける加奈琉。

それから自分の目で確認しないと納得がいかなかったのか、加奈琉は人ごみを縫って掲示板の前まで行って戻ってきた。

「もーショックだよー、私も二人と同じクラスがよかったなあ」

がつくりと肩を落としている。

加奈琉、そこまで俺と一緒にのクラスが……。

「まあ、仲良い友達がけっこういたからよかったかな」

「……だよな」

大して落ち込んでいないようで俺としてはほっとしたような、切ないような。

同じ敷地内にある加奈琉が通っていた中学校から進学してきた生徒が大部分を占めるのがこの高校。

クラスに何人か仲の良い友達がいても全然おかしくないよなあ。

しばらくしてアナウンスによって新入生は講堂へと集まるように呼びかけられた。

二人と共に入学式の会場へと向かう。

気づいたのだが、どうやら今日は他の在学生たちは休日となっているみたいだ。

それにしても・・・広い！

scene 2 - 4 教室

わーい、講堂だあー

走り回りたくなるほど広い、しないけど。

間もなく始まった入学式は想像通り退屈なものだった。

もしかしたら今年『入学式』退屈』という公式を習うかもしれない、
良い予習になった。

式が終わると退屈な時間に魂を抜かれたような顔をした生徒たちが
講堂から吐き出されていく。

俺たちもその流れに飲まれるようにして講堂を後にした。

このあとはクラスごとに分かれて各教室で話があるらしい。

教室の前で加奈琉とは別れ、俺と咲坂さんはD組の教室へと入った。

教室ではすでにあちらこちらにグループができていて、会話に花を
咲かせていたりした。

これを見る限りやっぱり知り合いどうしが多いらしい。

前のほうでは教師らしき服装の人が黒板にチョークをはしらせてい
る。

女の人だ。

彼女はチヨークを置くところらへ振り返った。

「それじゃみんな席についてくださいーい」

透き通った感じのかわいらしい声だ。

声だけ聞いたら小学生と間違えてもおかしくないその声も、教師という職業にはむいているかもしれない。

教室にいた全員が彼女に注目した。

「先生、どういう順序で座ればいいんですか？」

前のほうにいた一人の生徒が質問した。

「どこでもいいですよ、好きな場所に座ってくださいーい」

さて、どこに座ろうかととなり立っていたはずの咲坂さんのほうを見る。

が、もうそこに彼女の姿はなく、すたすたと窓側の最前列の席に腰を下ろすところだった。

いつのまに!?!?

ひとりでは心細いので、咲坂さんの近くに座ろうかと考えていた俺

しかし、前のほうには座りたくはなかったので仕方なく同じ窓側の

後ろのほうに座った。

「皆さん座れましたかー？」

空いている席がないか確認している様子。

全員そろっていることを確認し終わると、先生の自己紹介が始まった。

女性の担任で、名前は水沢芳江^{みずさわよしえ}、年齢はナ・イ・シヨらしい。

女性の年齢を詮索する趣味などないが、これはまた別の問題だろう。

気になる、気になる……。

気になったっていいじゃない、俺たちより幼く見えるんだもの！

ついつい腕を組んで水沢先生のことをまじまじと見てしまっていたことに気づく。

うーん、どう見ても……うーん。

「今日は席を決めて、プリントを配るだけでとくにすることもないから」

と言いプリントを前からまわしていく。

これといって不満も出なかったので席は最初に適当に座った場所で固定された。

「今日はずまらない話を長々と聞かされて疲れたでしょ？明日はいろいろ決めることがあるから休まないでね」

そんなこんなで登校初日はあっさりと幕を閉じた。

scene 2 - 5 解放

時刻はちょうど昼をまわったところ、ちょうど小腹もすいてきた頃合だ。

クラスメイトたちの中には、そそくさと教室を後にする者やこれから昼飯を食べに行こうと仲間で計画を立てている者などそれぞれで、教室内がいくらかざわついている。

咲坂さんは前者のようで、ようやく拘束から解放され俺が両腕を上を持ち上げてこった背中を伸ばしているときにはすでにその姿は無かった。

俺ものろのろと帰り支度を始める。

たぶん加奈琉も友達と昼飯を食べにでもいくだろつ。

一方俺はというと、これから明日からの通学に必要な自転車を買いに行かなければならない。

たしか駅前に自転車屋があったはず。

しかしその前に俺も腹ごしらえをしたいところだ。

駅前で適当なファーストフードでも・・・と考えて、今日渡されたプリントたちをバッグの中へ滑り込ませているところへ不意に隣から声をかけられた。

声の主は隣の席になった女子で、名前は・・・そういえば自己紹介

とかしてなかったな。

「お、小鳥くん・・・この後って時間ある？」

髪は茶色、毛先は若干ウェーブしていて全体的にふわふわしている。

顔のパーツは加奈琉のパツチリというかきりつとした感じとは違ってやわらかい感じでおっとりした印象を受ける。

加奈琉とは違ったベクトルでこれまた可愛い。

「いや、あの・・・とりあえずどこかで昼飯を済ませようかなあと」

予想外の人物からの問いかけに違和感を持ちつつこたえる。

「そうなんだ？じゃ、じゃあ一緒にお昼どうかな？よかったら学食とか案内するし。あ、で、でもほんとに迷惑じゃなかったらでいいんだけど・・・」

学食なんてものがあるのか、これからお世話になるかもしれない。

「じゃあお願いしていいかな？」

思わぬうれしいお誘いに俺は喜んで応じる。

その子と一緒に教室を出る瞬間、背中に妬みの視線がグサグサと突き刺さってきたのは気のせい気のせい。

それからその子と並んで歩き始めたのだが、・・・まだお互い自己

紹介をしていなかった。

それなのに、それなのにだ！なぜか彼女は俺の名前を知っていた。
なぜだ？

朝の掲示板前での咲坂さんのときもそうだった。

加奈琉から俺の名前を聞いたとたんに同じクラスだと言った。

そんな物凄く珍しい名前か、事前に名前を知っていなきゃできないと思う。

そして今隣を歩いている彼女も。

もしかして以前にどこかであったことがあっただろうか？

もしそうだとして俺が一歩的に忘れてるだけだとしたら・・・。

学食を案内すると言ってくれたのだから加奈琉と同じ中学出身なのは間違いないのだけど・・・。

聞けない、今こちらから名前を聞くのはためらわれる。

どうしよう・・・。

scene 2 - 6 学食

結局そこから学食に着くまでの間、俺は彼女の名前を聞けないままだった。

俺がいたらないばかりに……。

申し訳ないが、しばらくの間彼女のことは俺の脳内ではふわ子ちゃん（仮名）としておく。

無論、さっきからスカートがふわふわと揺らめいて見えるか見えな
いかのぎりぎりの境界線を漂っているからである、まあ嘘だけど。

学食は2ヶ所あるらしく、今日案内してもらったのは教室から近い
ほうらしい。

学食A・学食Bとそれぞれ名前がついていて、生徒の間ではA食・
B食と呼ばれているそうだ。

今いるここはA食にあたる。

それぞれの学食には違いがある。

A食には丼物・麺類・ピュッフエ、B食には麺類・数十種類の一品
物の惣菜やおかずなどがメニューとして用意されている。

今日は2、3年の生徒たちがいないこともあってA食はガラガラだ

った。

もしかしてやっていないのではとも思ったけれどちらほらと食事をしている人が見受けられた。

俺たち二人は適当な場所に席を確保して、メニューを注文しに行く。ふわ子ちゃんが先にうどんを頼んだのをみて俺はためきうどんを頼んでみる。

パートのおばさんへの愛想笑いもかかさない。

品物を受け取り、七味に手首のスナップを利かせる過程を経て席に戻る。

先に食べずに待っていてくれた健気なふわ子ちゃんと共に『いただきます』のハーモニー。

しかし、一向に食べ始めようとしないふわ子ちゃんを不思議に思っている。

「猫舌なんだ」

と恥ずかしそうにこたえた。

ここまできても俺はまだふわ子ちゃんの名前を聞けずじいた。

うどんを食べながら、どこかで会ったことがなかったかと色々思い返してみたのだがどうにも思い当たる節がない。

思考にふけりながら、ひたすらちゅるちゅるする作業に没頭していた俺。

このままでは埒が明かなく考えた俺は失礼を承知で聞くことにした。

「ひとつ聞いてもいいかな？」

scene 2 - 7 七瀬

「ん？」

フツ、フツと熱々のうどんを一生懸命冷ましていた手をとめ
こちらに目を向ける。

その動作があまりにも可愛くてしばらく見ていたかったのだけれど
仕方ない。

未練を内に秘めつつ話を続ける。

あくまで笑顔をつくりながら。

「お互いまだ自己紹介してなかったよね、俺は小鳥幸太郎」

言い終え彼女の顔色をうかがう。

どきどき……。

しかし、その表情からはなににも感じ取ることができなかった。

「……そうだよね」

ポツリとつぶやいた後、

「ごめんなさい自己紹介が遅れて、私天ノ宮中出身で七瀬ななせっていい
ます」

七瀬、七瀬・・・しかしその名前にも思い当たる人間がいなかった。俺が考え込んでいるのを不安に感じたのか、七瀬さんから話をふってきた。

「え、えっと・・・小鳥くんってどこから通ってるの？」

「方角としては駅のほうかな。距離的にはここから駅までのちょうど中間くらいで、駅と学校と家を結ぶと二等辺三角形ができるような感じ」

「ふーん、じゃあ自転車通だ？」

「なんだけどね」

持ってきたナプキンで一度口を拭く。

「肝心の自転車をまだ持ってなくて、今日これから買いに行くつもり」

力なく笑ってみせる。

「あ・・・もしかしてお昼に誘っちゃったのまずかった？」

不安そうに上目づかいでこちらをみる七瀬さん。

ずきゅーん

この子は素で俺の弱点を心得ていらっしやる。

俺がねずみなら七瀬さんは猫、マッコウクジラならシャチ、炎タイプなら水タイプといったところ。

俺のライフポイントが悲鳴を上げている。

「いや、全然！もともとどこかで食べるつもりだったし」

「・・・そっかよかった」

胸をなでおろし、微笑む七瀬さん。

「そうだ！知り合いの自転車屋さんがあるんだけどそこならちょっとサービスしてくれるかも。」

俺は麺を食べ終え残りのスープを飲み干す。

「あ、・・・もしよかったら」

「案内してもらってもいいかな？七瀬さん」

七瀬さんの顔がぱあっと明るくなる。

「うん！・・・あ、それでね、場所が駅前なんだけど小鳥くん大丈夫？私は駅からバスで通ってるから、定期があるんだけど・・・、小鳥くんは今日歩いてきたの？」

「歩いてきたよ」

嘘だ、自分でもわからないがとっさに嘘をついてしまった。

まあでも自転車は加奈琉が乗って帰るだろうから間違っではないのだけ。

「俺も駅までは七瀬さんとバスでいくよ」

「わかったあ。で、小鳥くんは今ひとりで・・・」

「七瀬さんっ！」

「は、はいっ!?!」

「うどん冷めちゃうよ?」

さっきから一向に手のつけられていないうどんを不憫に思った俺は七瀬さんの言葉をさえぎった。

うどんを不憫には思わないけど。

それからいそいそとうどんを食べはじめた七瀬さんに急がなくていいからと促してから席をたつ。

二人分のお茶をいれて席に戻り、冷たいほうのお茶を七瀬さんの前に置いて自分は熱いお茶に口をつける。

年中そうなのか、それともこんな季節だからなのか、お茶は2種類熱いものと冷たいものが用意されていた。

猫舌の七瀬さんには冷たいお茶のほうがいいだろう。

熱いお茶を飲みながら至福の一時を過ごす。

なんてったってお茶が美味しい！

思わずにやけてしまいそうになる口元をお茶を飲むフリをして湯のみで隠す。

お茶が美味しいのだ、決して七瀬さんの食事風景をみてにやけそうになっっているんじゃないぞ、ゴホンゴホン。

麺を・・・箸で・・・つかんで・・・ちゅるちゅる

麺を・・・箸で・・・つかんで・・・ちゅるちゅる

ネギを・・・箸で・・・ゴホンゴホン

俺はまだ熱いお茶をいつきに飲み干した。

scene 3 - 1 自転車屋で大男をみつけたよ

昼下がりの駅前は大勢の人でにぎわっていた。

昨日ここを通ったときは日が暮れていたこともあり、それほど人通りがあつたわけではないのだけれど、今日の光景をみると渦巻く人々の波に圧倒されてしまう。

なにを隠そう俺の地元はなかなかの田舎レベルを備えていたわけで、近隣の市町村と合併するまでは駅のひとつも存在しなかつたくらいだ。

駅ビル、スクランブル交差点、街頭テレビ。

変わったデザインの時計台の周りには、待ち合わせをする若者が目立つ。

高校前から乗ったバスは駅前が終点で、必然的に俺たちはそこで降りることになった。

七瀬さんが紹介してくれた自転車屋は駅前の大通りから1本外れた道に店を開いている。

バス停から歩いて10分くらいだろうか。

『よつばサイクリング』と書かれた看板。

その店の前で体格の良い男が自転車のパンクを直していた。

隣を歩いていた七瀬さんが呼びかける。

「次郎しゅうさん！」

次郎と呼ばれた男がこちらを振り向き立ち上がる。

「よお、ひかりちゃん」

体格の良い男と言ったが、前言撤回だ。

体格の良い大男がにこやかに手をあげた。

「こんにちは」

てか、七瀬さんの下の名前はひかりっていつのか。

どついう字書くんだろう……。

「そちらさんは……もしかしてあれかい？ひかりちゃんの」

「クラスメイトの小鳥です、はじめまして」

簡単に自己紹介を済ませる。

この人……次郎さんっていったっけか、190センチはありそう
だ。

年は30前半くらいかな？

ヒゲを生やしているので実年齢より老けてみえているのかもしれない。

こう正面から向かい合うと相当な威圧感がある。

その大きな身体から俺たちを見下ろすようにして見比べている。

「ふーん」

ふーんってなんだ、ふーんって。

「自転車みたいんですけど、いいですか？」

「おお、すぐにこっち終わらせるから中入って勝手に見てな」

そう言うで大男改め次郎さんはタイヤの修理に戻った。

それにしてもこんなに体格のいい大男が自転車修理のような細かい作業をしているのはどうにも似合わない風景ではある。

腕の太さやごつごつした体だけみれば、廃車を担いで投げ飛ばしていそうなのに。

店内は外観から想像した以上に広いスペースだった。

壁にはいくつかの最新の自転車がインテリアのように飾られ、フロアには等間隔でテーブルが置いてある。

無駄なものが一切ない快適空間！

まるで小洒落たカフェのよう。

・・・ってあれ？

ここ自転車屋だよね？

scene 3 - 2 てつきりカフェかと思ったよ

予想していなかった店内の風景にあっけにとられていると、

「小鳥くん、こっちこっち」

と、奥のほうから七瀬さんに呼ばれた。

店の奥にあった扉を抜けるとそこにはまるで・・・じゃなかった、まさに自転車屋といったように何十台もの自転車がずらりと並べられていた。

「びつくりしちゃったよ、自転車屋っていうよりカフェみたいでさ」
率直な感想を述べる。

「ふふっ、そうだね、次郎さん副業だっっていうって趣味でカフェみたいなことやってるから」

むしろそちらが本業なのでは？

と思うほど全面に展開されていたけど。

「小鳥くん、どんな自転車がいいのかな？」

「いや、まあ普通のでいいんだ、変な機能の付いてない普通ので。安いとなお良いけど」

「タイヤは大きいほうがいいよね、だったら・・・」

自転車を見定めながら歩く七瀬さんのあとをついていく。

「これなんて良いと思うけどどうかな？」

立ち止まり指さした自転車を見る。

ふむふむ。

ぱっと見た限りではダメな理由も見つからないし、正直どれでも良いというのが本音だったり。

それが七瀬さんの選んでくれたものとなれば、それはもうケチのつけようなんてない。

「いいんじゃないかな」

と口にしつつ値札を見て、諭吉でお釣りがくるといふ良心的な数字の並びに胸をなでおろした。

「色は何色がいい？」

あー、

「そうだな・・・七瀬さん選んでよ」

「え、いいの？」

七瀬さんの好きな色の傾向を知りたいの5割、色なんて何色だって

かまわないの5割。

「じゃ、じゃあ・・・私はこのピンクのが可愛くて好きなんだけど・・・」

メモメモ。

ピンクかぁ、女の子らしくてなにより。

「小鳥くんにはね、こっちの水色が似合いそうだからこっちで」

「うん、じゃぁこれに決めた」

そこへベストなタイミングで自転車屋兼カフェの店長がやってきた。

「おう、決まったかい？」

背でかつ！もう一度、背でかつ！

『高い』というよりどうしても『でかい』と言ったほうがしっくりくる。

この威圧感に慣れるには時間がかかるだろうなあ。

「これなんですけど」

と、七瀬さんが言つと値札を外して軽々と片手で持ち上げてしまった。

これだよ、これでこそ次郎さんだ。

重そうなものを担いでいる姿がこれほど似合う人を俺は他に知らない。

なんちゃってカフェのほうへ自転車を持っていくとカウンターの前で自転車を下ろした。

カウンターの奥にはコーヒード豆や茶葉やら、それはもうカフェとかバーとかそういう雰囲気存分にかもし出す食材や備品が揃えられていた。

「じゃあお代なんだが・・・」

カウンターの下から電卓をとりだす。

「税込みの8900円」

俺は財布からおもむろに1万円札を取り出す。

「のところを、『ひかりちゃんのお友達割引』で2割引」

「いいんですか？」

「ああ、しかも今回は特別に『入学祝い割引』も含めて3割引」

なんて気前が良いんだ次郎さん！

七瀬さんとは今日知り合ったばかりだぞい！

「さすが次郎さん！」

と、七瀬さんもおだてる。

負けに負けてくれたお代を払うと、自転車を外まで運び出し空気を入れ不備がないか点検をしてくれた。

「また、なにか修理が必要なときはおいで、友達割引でやってやるから」

「ありがとうございます」

なんとも気さくな人だ。

「あと、暇なときにはコーヒーも飲みに来てくれよ、そっちも割り引くからさ」

「はい、また今度寄らせてもらいますね」

「次郎さんありがとね」

七瀬さんもそう言って微笑む。

「そうだ、君ちよっと」

ん？なんだろうっ……。

ちよいちよいと手招きして俺を呼び寄せる次郎さん。

「『ひかりちゃんの彼氏割引』ってのもあるからな」

そう耳打ちすると笑いながら背中をバシバシ叩かれた。

なんか勘違いされてるような・・・。

まあ別にいいけどね、別に。

その時の俺の表情は目と口がすべて横線になっていただろう。

scene 3 - 3 ケーキでも食べようか

自転車を押しながら七瀬さんと駅前に戻る。

大通りに出るとそこは相変わらずの人通りの多さを保っていた。

彼女のおかげで今日は良い買い物できた、財布の中身もほんのりあたたかい。

感謝、感謝。

スクランブル交差点の信号が青く点灯し、全員が一斉に歩き出す。

と、渡り終える直前、前方から走ってきたスーツ姿の男性。

「きゃっ！」

その男は左隣を歩いていたら七瀬さんの肩に勢いよくぶつかったのだ。

なんてやつだ！

七瀬さんは後ろへ突き飛ばされ、バッグの中身が辺りに散らばった。

男はよほど急いでいたのか、何度か大きく頭を下げ謝るとすぐに走って行ってしまった。

俺は少し先に自転車を止め、今度は七瀬さんを立たせてあげると散らばったものを急いで拾う。

信号が点滅を始める。

全て拾い集め、七瀬さんの手を引いて自転車を停めた位置まで向かう。

「怪我とかしなかった？」

「う、うん・・・大丈夫だと思う」

七瀬さんは制服のスカートについた埃を掃う仕草をする。

その左手にうつすら血がにじんでいた。

「七瀬さんって甘いもの平気？」

「え？うん、好きだけど」

「じゃあ、ここは入っていかない？傷口洗ったほうがいいよ。あと、お礼ってわけじゃないけどさ、七瀬さんのおかげで手持ちもあるし」

来的时候に見つけておいたケーキショップを指差す。

実際理由はそれだけじゃないけど。

きよろきよろと傷口をさがしていた七瀬さんに、

「左手首のところ、袖まくったほうがいいよ」

と、教えてあげた。

scene 3 - 4 たしかどこかで

「いらっしゃいませー！」

中に入ると、元気のいいお姉さんに奥へと案内された。

俺はコーヒーで七瀬さんはカフェオレ、それと日替わりケーキを2つ注文した。

注文を終えると七瀬さんは傷口を洗いに席を立った。

彼女が見えなくなるのを確認すると、俺はポケットからあるものを取り出した。

指輪だ。

給料3ヶ月分とはよく言ったもので、俺はこの3ヶ月間を今日この瞬間のために費やしてきた。

今日で彼女と付き合いだしてからちょうど1年がたつ。

俺は決めていた、今日必ずプロポーズすると。

準備は万端だ。

これを見せたらどんな顔するかな？

思わず顔がにやけそうになる。

というくだらない妄想とか、水の入ったガラスのコップに口をつけてみたりして気分を落ち着かせる。

もう一度先ほどポケットから取り出したものを見る。

どうみても……。

見覚えのある小さな人形。

実はさつき七瀬さんのバッグの中身を拾い集めているときに見つけて、拝借してしまったのだいなのだが。

人形とにらめっこしていると、先ほどのお姉さんがケーキと飲み物を運んできてくれた。

とっさに笑顔をつくって対応すると相手もにこやかに笑ってくれた。

人形と話してる変な人って思われたかな……。

まもなく七瀬さんが戻ってきた。

「お、おまたせ」

イスに座った七瀬さんはケーキにひとしきり感動した後カフェオレに口をつけた。

俺はタイミングを見計らいつつ、意を決して話しかける。

「百瀬さん」

彼女の肩がビクツと震えた。

ケーキに刺さったフォークがそのままの状態で止まっている。

俺は気持ちを落ち着けるためにコーヒーに口をつける。

「気づいてたの？」

やっぱり。

「いや」

「でも、覚えてくれてたんだ」

彼女の顔がほころぶ。

「久しぶりだね、4年ぶりかな？」

俺はケーキの上に乗っていたブルーベリーを口の中へ放り込んだ。

scene 3・5 この甘酸っぱさがいい

ブルーベリーの甘酸っぱい香りが口の中に広がる。

俺は自主的に預かっていた人形をテーブルの上に置いた。

それを見ると七瀬さんはハツとした表情をして、バッグの中を確かめ始めた。

「あ、あれ？あれ？なんで？」

どうしてこの人形を俺が持っているのか、まあさっき荷物を拾い集めているときにこっそり拝借したのだけけれど。

「ごめん、さっき七瀬さんがぶつかって転んだときにね」

すると七瀬さんは納得したようにバッグを横に置いた。

「いや、何で言ってくれなかったのかなあと思って」

そう俺が言つと七瀬さんは一瞬叱られている子どものような表情をしました。

うーん、だめだなあ。

なんとも俺は人と会話するのが苦手というか、上手くないような気がする。

「最初はね、気づいてくれると思って話しかけたんだけど」

そこで気づかなかったのは俺の責任だ、だけど……。

士、3日会わなければ、これ、活目してみるべし。

誰の言葉だったか、男とは3日会わなければ凄く変わっているものだからよくよく見なければならぬとかそんな意味だ。

男でさえ3日会わなかっただけで変わると言っているのに、ましてや七瀬さんは女性だ。

4年も会っていないければそりゃあ激変するもので。

俺が気づかなかったのも無理もない！

ということにしてもらいたい、……してください。

「小鳥くん全然気づいてないみたいで」

ごめんなさい。

「それ見てたらもしかして私の存在自体忘れちゃってるのかもって思っ
て」

ソナナコトアルワケナイジヤナイデスカ。

いつの間にか立つ瀬がなくなってきたような。

「言っつのが怖くなっちゃったの」

おい、小鳥幸太郎！お前が一目会ったときに気づけばよかったんだよ！

おっしやるとおりで。

実は七瀬さんとは小学校の同級生だった。

再会できてすぐくうれいはずなのに、なんだろうこの空気は。

あーそつかあ、僕が今の今まで七瀬さんに気づかなかったからかあ、
やっっちゃっちゃ

だつてさー、あのおときから名字変わってるんだもの！

そう、小学校時代の彼女の名字は百瀬だった。

ももせひかり
百瀬陽、それが彼女の名前で、俺の頭の中に鮮明に記録されていた。

百が七になっただけじゃないか！そんな声も聞こえてきそうだけど。

加奈琉もそうだけど見た目が変わりすぎなんだもん！

それにさ、久しぶりに再会した女の子は誰だか気付かないくらいに可愛くなってたり美人になってたりするのがお決まりなのさ。

そんなの小説とか漫画の中だけの話だと思ってたけど実際目の前で起きてるんだからしょうがない。

「じゅめん、名字変わったたしさ・・・」

ここにきて言い訳とは見苦しいぞ俺！

「そ、そっだよね」

七瀬さんに気まで使わせて。

「それに、随分会ってなかったから可愛くなってる」

あ、ますますって付けるの忘れた。

「か、可愛いだなんてそんな！」

頬をつつすら桜色に染めて否定する。

そっいうところが可愛いっていうんだ。

どうして目の前にいる彼女が小学校の同級生である百瀬さんと同じ人物だと気がついたか。

それは自転車を営む次郎さんが七瀬さんのことを“ひかりちゃん”と呼んだこと。

そして、偶然にもこの人形を見つけたからだ。

「今は“七瀬”って名字なの？」

「うん、うそをついてたわけじゃないよ」

「じゃあ俺はこれから七瀬さんって呼んでいいんだね」

「む、昔みたいに・・・」

俺はぬるくなったコーヒーを口に含む。

「・・・ひかりちゃんでも・・・いいけど」

ぶふっ！

思わずコーヒーを噴出しそうになった。

「恥ずかしいからやめとくよ」

七瀬陽。

それが今の彼女の名前だ。

scene 4 - 1 保健室×消毒

これは俺がまだランドセルを背負っていた頃の話。

初めて七瀬さんと同じクラスになり、初めて言葉を交わしたのは体育の授業のときだったと思う。

男子と女子に分かれて、男子はサッカー、女子はドッジボールをしていた。

そのときだった。

2チームに分かれて行われていたサッカーの試合中に、俺はできもしない玉乗りを披露してしまったのだ。

全自動ウルトラC！

もちろん不可抗力で、結果は言わずもがな。

不名誉の傷を負った俺は試合開始早々の退場となった。

「おい保健委員のやつ、小鳥を保健室まで連れて行ってやってくれ」

先生のその声で少し離れた場所でドッジボールをしていた女子までもが俺の負傷に気がついてしまった。

先生余計なことを・・・。

格好わるいつたらない。

そのとき俺を保健室まで連れて行ってくれた保健委員というのが七瀬さんだった。

「う、うわー、小鳥くん大丈夫??」

駆け寄ってきた七瀬さんが心配そうに傷口を眺める。

初めて名前を呼ばれたことに対して一瞬ドキツとした。

「大丈夫だよ、つき合わせちゃってごめんね」

「いいの、私保健委員だし」

七瀬さんに付き添われて保健室に行き着いた俺たちだったが、そこには先生の姿はなかった。

「あれ?いないや」

「ほんとだ、でも大丈夫、私傷の手当てくらいならできるから」

任せてと両拳を握り締めると、慣れた手つきで棚から消毒やガーゼを取り出し始めた。

「まず水で傷口洗ってきて」

言われたとおりに傷口を洗って戻ると、丁寧に手当てをしてくれた。

「ありがとっ、じゃあ戻ろっつか」

「お、小鳥くんちよっと待って・・・」

俺がイスから立ち上がるうとすると、たった今手当てをしてもらった上から思い切り腕を掴まれた。

「っ!」

思わず苦痛に顔がゆがむ。

「・・・!ご、ごめんなさい!」

「・・・大丈夫、大丈夫」

俺は今上手く笑えているだろうか？

「で、なに？」

「もしよかったらその左膝のところ・・・」

自分の左膝の辺りを見してみる。

記録より記憶に残る素晴らしい転び方をしてしまったおかげで、体操着が破れて穴が開いていた。

「縫ってあげようか？」

「え、悪いよ、傷の手当てまでしてもらったのに」

と、一時は遠慮したのだが、しゅんとした七瀬さんの表情に負けて結局お言葉に甘えることにした。

教室のロッカーに裁縫セットがあるからということであれ二人は教室へと向かった。

「じゃあ小鳥くん、脱いで！」

「ちよ、いきなりなにを！」

すると七瀬さんの顔がみるみる桜色に染まっていく。

「冗談です、ごめんなさい」

素直に体操着の長ズボンを脱いで七瀬さんに預ける。

もちろんその下は下着というわけではなく、ちゃんと半ズボンをはいていた。

七瀬さんがズボンを縫っている間、俺は教室の窓から体育の授業の風景を眺めていたのだが、しばらくすると飽きてしまいそれから七瀬さんの様子を近くに座って眺めていた。

なんといってもその手際の良さに見入ってしまったのだ。

途中で七瀬さんに、

「恥ずかしいからそんなに見ないで」

と言われてしまっほじ。」

「えっと・・・も、百瀬さんってなんでそんなに裁縫上手いの？」

「私、お家で時々やってるの。人形とか作ったり、小さいやつだけど」

そしてランドセルについていた可愛い兎のマスコットを見せてくれた。

あまりのできの良さに感動してしまった。

「すごいっ、これ百瀬さんが自分でつくったの？」

「う、うん、そんなに難しくないんだよ？」

少し照れながら作業に戻る。

「あと呼び方・・・ひかりでいいよ、みんなそう呼ぶから」

「そっか、じゃあ・・・」

でも、呼び捨ては気が引けるなあ。

「ひかりちゃんて」

「うん」

scene 4 - 2 教室×人形

今日日直の役目をおわされていた俺は、放課後になり学級日誌というものを職員室にいる担任に提出してきた。

その日の欠席者、授業、起こった特別な出来事、記載者の一言などどうでもいいことを書いて記録するのだ。

本当にどうでもいいと思いましたが、まる。

「失礼しましたー」

職員室を出た俺は急いで教室へと戻る。

廊下を走るな？そんなの知るか。

全速力で階段を駆け上がった。

教室の前まできて息を整える。

ガラスとドアを開けると彼女は窓際の席に座って校庭を眺めていた。

「小鳥くん、お疲れさま」

ひかりちゃんだ。

あの保健室でのことがあって以来、俺とひかりちゃんはこうして放

課後の教室で待ち合わせをしている。

ひかりちゃんの趣味が裁縫だということを知ったあの日、彼女の作った小さな兎のマスコットに感動した俺。

すると彼女は難しくないんだよと、俺にも作れると言ってくれた。

それを聞いた俺はすっかりその気になってしまい、もうすぐ訪れる妹の誕生日に人形を作ってプレゼントしたいという無謀にも思える計画を思いついてしまったのだ。

その旨をひかりちゃんに伝えると、彼女は快く協力を約束してくれた。

それからほぼ毎日のように少しずつではあるが、ひかり大先生に教えを賜りながら人形作りを進めていった。

チクチク・・・チクチク・・・。

初めのうちはイチロー並みの打率で自分の指を針で突き刺していた俺だったが、今ではもうだいぶましになってきた。

それもひとえにひかりちゃんの教え方が上手かったこと、いつも俺のことを気遣って指の本数よりも多い枚数の絆創膏を用意してきたくれたこと、それに尽きる。

熱しやすく冷めやすい性格だった俺が人形を完成させるところまで行き着くことができたのは彼女のおかげなのと言っまでもないこと。

無事完成を迎えることができたのは誕生日の当日の放課後だった。

「できたー!!」

「やったね、お疲れさま！」

精一杯の笑顔で俺をねぎらってくれるひかりちゃん。

「ありがとう！ひかりちゃんのおかげだよ！お礼は必ずするから」

「い、いいよそんな！」

「だめ、するから」

「・・・うん」

夕日の差し込む放課後の教室で少しうつむいた彼女の顔にまつげが影を落とす。

ようやく完成したという達成感で心が満たされる。

床にハチミツを広げたような色に染まった教室もたったふたりで満たされている。

そこにいること、息をすることさえ心地よい空間。

放課後の教室は、これ以上誰一人として入ることができないほどに飽和していた。

よし、あとは妹に渡すだけだ。

渡したとき妹がどんな顔をするのか楽しみで仕方なかった。

結果は大成功だった。

俺が自分で作ったものだと言えど、妹はさらに喜んでくれた。

次の日。

今度はそのことを、人形作りを手伝ってくれたひかりちゃんに伝えることが楽しみでいつもより早く学校へ着いてしまった。

ひかりちゃんも喜んでくれるかな？

どうやってお礼をしようかな？

ひかりちゃん早くこないかな？

しかし、そんな俺の想いとは裏腹にその日ひかりちゃんは学校に来なかった。

scene 4 - 3 公園×涙

それから3日たっても彼女は学校に姿を現さなかった。

徐々に生徒たちの間での不信感が募りはじめた中、先生が口にしたのは家庭の事情という曖昧な理由だった。

そしてそれから1週間がたつ頃にはまるで何事もなかったかのように学校生活はまわっていて、ひかりちゃんの名前を出すクラスメイトもいなくなっていた。

そんな中ずっとモヤモヤとした気持ちを抱えていたある日の放課後、俺は一人の女子に話しかけられた。

「小鳥くん、ちょっといい？」

それはひかりちゃんが学校でよく一緒にいることが多かった友達の一人、たむら田村さんだった。

「最近ひかりと仲良かったよね？それで、何か聞いてないかな、休んでる理由とか」

彼女は心配そうに聞いてきたのだが、それは俺も同じでこっちが聞きたいくらいだった。

「悪いけど俺も何も聞いてないんだ、詳しいこと聞けたらと思って先生のところにもいったんだけど、難しい問題だからそっとしておいてやってってくれて」

悔しかった。

理由を聞いて考えるのは俺だろとも思った。

確かに俺はまだ子どもだし、間違った行動をとるかもしれない。

それでも、事実を知ることすら許されないなんて。

必要なときに必要な力がないことは苦痛だった。

「そっか・・・私ひかりのこと心配で」

「俺もだよ」

田村さんの言葉は素直に嬉しかった。

まるでひかりちゃんが最初からいなかったかのように送られる学校生活。

みんな彼女のことを忘れてしまったのではないかとさえ感じた。

でもそうじゃなかった。

俺と同じように心配しているクラスメイトがいるじゃないか。

そのことに俺は少し心が楽になった。

「それで、その・・・ひかりの家に様子を見に行きたいんだけど一人だと心細くて、小鳥くん一緒に来てくれない？」

「もちろん行くよ」

俺は迷わず誘いを受け入れる。

それから二人でひかりちゃんの家へと向かった。

「ひかり、怪我とか病気じゃないよね・・・」

それならそれで先生もちゃんと言っただろうし、むしろ治るような怪我や病気ならばそれはそれで安心だと思いつい不謹慎なことを考えてしまう。

「大丈夫だよきっと」

大丈夫ならどうして学校にこられないんだよ。

田村さんの不安を少しでも取り除こうとして発した自分の言葉を心の中で否定してしまう。

小学生の俺の頭では、

『今は何かしらの理由があつて学校を休んでいるけど、ひかりちゃんには何の心配もなく元気だ』

これを満たす“何かしらの理由”が思い浮かばなかった。

程なくして俺たちはひかりちゃんの家に着いた。

ドアの前に立ち、田村さんが呼び鈴を押す。

中から出てきたのはひかりちゃんのお母さんだった。

「あら、ひかるのお友達？」

「はい、あの……」

何て言えばいいんだ。

お見舞いに来たっていうのもおかしいし、遊びに来たっていうのも……。

言葉に詰まった俺の代わりに答えてくれたのは田村さんだった。

「ひかりちゃん最近学校休んでるから心配で様子見に来たんですけど」

「そう、わざわざありがとうね。ちょっと待っててね」

そう言って俺たちふたりを玄関先に残して再び家の中に戻っていった。

「ふう……緊張したあ」

胸をなでおろす田村さん。

それから5分くらいたってようやくひかりちゃんのお母さんが戻ってきた。

その顔は本当に申し訳なさそうで、

「お友達が会いに来てくれてるって伝えただけど、今は誰にも会いたくないって聞かなくて、本当に申し訳ないんだけど今日は・・・本当にごめんね、ありがとうね」

そう俺たちに伝えた。

それを聞いて田村さんは下を向いてしまった。

俺は慌てて言葉を返し、失礼しますと田村さんの手を引いてひかるちゃんの家を後にした。

田村さんがひかるちゃんのお母さんの前で今にも泣き出しそうだったから。

それは向こうも心配するし、困ると思った。

俺は田村さんの手を引いてすぐ近くの公園まで連れて行きベンチに座らせる。

俺も荷物を下ろして彼女の隣に座った。

「・・・私が泣くとも思った？」

うつむいたまま田村さんが言った。

前髪で目元が隠れていて表情はよくわからない。

「え？」

「ごめんね、私が誘ったから・・・会いたくないなんて言われて」

「いや、別に・・・」

悲しくないといったら嘘になる、だけど。

「田村さんのせいじゃないし・・・それに、ちゃんと家にはいて病気とかではなかったんだって思えただけでも良かったよ」

「私ね、」

力なく話し始めたその声に俺は耳を傾ける。

「ひかるとは昔から友達でお互いにけっこう大きな存在だと思ってたんだ・・・でも今回のことは何も話してくれなかった。そう思ってたのは私だけだったのかなって思ったら情けなくて・・・」

そうだ、俺なんかよりずっと付き合いの長い彼女がその親友から会いたくないなんて言われて、ショックを受けるのは当然だ。

しかも、その理由がわからないのだから不安になるのも頷ける。

俺でさえ、まだ動揺しているのに。

「親友だから言えないこともあると思うよ」

「小鳥くんにも何も言わなかった・・・」

「俺なんて話すようになったの最近だし」

そう、田村さんに比べたら俺なんてまだ本当に付き合いが浅い。

これからもつと仲良くなれる、親しい友達になれると思っていた矢先の出来事だった。

「何もしてあげられない、何をしたらいいのかわからないのが悔しい……」

田村さんの頬を涙がつつたつてこぼれた。

必要なとき必要な力がないことは苦痛だ。

「そんなに思い悩むことでもないのかもよ？」

俺なんか知ったような口をきくのは正直ためらわれた。

だけど田村さんを励ますには、

「明日になったら何事もなかったように学校に来るかもしれないし」
希望的観測の羅列。

結局俺は無力で、信じるとか祈るとかそついったことしかできない自分の気持ちに整理をつけることで精一杯だった。

「ありがと、小鳥くん。私心配性でさ」

「あ……うん」

「優しいんだね」

「……。」

「そっだ、ひかりが私だけに相談してくれたこともあったんだよ、
そっついとよっやく顔を上げてくれた。」

「あ、でもこれは小鳥くんだけには内緒」

そして、彼女はいたずらっぽく笑った。

scene 4 - 4 教室×夏雲

あの日、クラスメイトの田村さんと一緒にひかりちゃんの家を訪れてから早一ヶ月。

あれからどうなったのかというと、実はそのあと間をあけて再び何度か田村さんと家を訪れていた。

だけれどひかりちゃんは一度として俺たちに姿を見せてはくれなかった。

成果は全く得られなかったのだ。

そして季節はもうすぐ夏本番。

終業式を迎え、今日で1学期も終わりとなる日。

通知表がひとり一人に配られる中、俺はただぼーっと、まるで絵を切り取ってそこに貼り付けたように真っ白な雲が流れていくのを見ていた。

先生がなにやら夏休みの注意事項なんかを話している。

「には十分に注意して・・・」

先ほど配られた注意事項の書かれたプリントを眺めるふりをする。

先生にももう一度ひかりちゃんが休んでいる理由を聞きにいったけ

れど、やっぱり教えてはくれず、俺は途方にくれていた。

明日から夏休みかぁ・・・。

そんなどうでもいいことを頭のなかに浮かべていたときだった。

「・・・なかった百瀬のことなんだがな、」

先生の口から出た名前に俺はプリントから顔を上げ、続きを待った。

ひかりちゃんがどうしたって？早く言ってくれ！

「悲しい知らせになってしまっんだが、」

・・・っ！

「家庭の事情で転校することになった。引越し先はここから遠いんだが、住所は聞いているから教えてほしいやつがいたらあとで先生のところまで来てくれ」

ひかりちゃんが・・・引越す!?

「・・・ということだから・・・」

先生の話し声がだんだんと遠のいてゆく。

予想もしていなかった言葉に頭の中の整理がつかない。

頭が真っ白になるってこういうときにつかっんだ・・・。

「くん……小鳥くん」

田村さんの呼びかけで、帰りの会が終わりみんながもう帰り始めていることに気がついた。

「……ひかりが引越しちゃうって」

「うん」

気の利いたセリフが何も出てこない。

田村さんは引越しのことを聞いてどう思ったんだろう。

「私……」

泣いてはいなかった。

むしろ俺に見せたのはわずかな微笑みだった。

それが必死に貼り付けられたものであることに俺は気づかないフリをするしかなかった。

「……もう帰るね、また2学期会おっ」

そう言って彼女は教室を走って出ていく。

このままひかりと会えないままお別れなんていやだ。

今日これからもう一度会いに行ってみようよ！

そんなことを言われるんじゃないかと思っていた。

いや、違うかな・・・思っていたんじゃないかと期待していたのかも
しれない。

そしたら俺はなんて答えてたんだろう。

結局お礼らしいお礼もしてないし、報告だって。

ひかりちゃんのおかげで妹もすごく喜んでくれたよ！

それにうちの家族にも大好評でさ。

ひかりちゃんのこと褒めてたんだ、すごいって。

カバンの中からひとつの小さな人形を取り出す。

ほつれた糸が目立つ不細工なそいつ。

それを見て思わず笑ってしまう。

あまりにも今の自分にそっくりで。

まだひかりちゃんに教えてもらいたいことたくさんあるんだ。

聞きたいことも。

俺は不細工な人形を握りしめて、教室を飛び出した。

scene 4 - 5 河原×小指

体はひかりちゃんの家へと走っていた。

心は準備なんてできていやしないのに。

家にいってどうする？どうせまた同じことの繰り返しなんじゃないか？

そんなの言われなくたってわかってる。

今までと何も変わらない。

ひかりちゃんが学校を休んでいる理由がわかったわけでも、ひかりちゃんのお母さんを説得できる自信もない。

ただ、行動せずにはいられなくて。

夏の暖かな日差しの中、息を切らして走った。

川沿いの土手を駆ける。

川は太陽の光できらきらとひかっていた。

土手のゆるやかな斜面には草が一面に生い茂り、自然のじゅうたんを織り成してる。

そこで俺は足を止めた。

精一杯息を吸っては吐いてを繰り返して呼吸を整える。

そして俺は緩やかな斜面を川のほうへと下りていった。

近づいて声をかける。

「ひかりちゃん」

そこに彼女は膝を抱えるようにして座っていた。

俺の声に驚いて振り向く。

久しぶりにみたひかりちゃんの顔は以前と比べて少し痩せているように見えた。

良かった、逃げようとはしないみたいだ。

俺は隣に腰を下ろした。

明らかにひかりちゃんには元気がない。

そしてしばらくふたりで遠くを流れる川を見つめる。

聞きたいこと、話したいことが両方ともありすぎて何を話しているかわからなかった。

しばらくして俺は話し始める。

「ひかりちゃんに手伝ってもらって作った人形、妹の誕生日に渡したんだけどすごく喜んでもらえたよ。ありがとう」

「ほんとに?・・・よかった」

そう言ってひかりちゃんは少しだけ笑ってくれた。

嬉しかった。

その笑顔をどれほど待ち望んだことか。

「ほ、ほんとほんと!うちの家族みんな感心しちゃてさ、ひかりちゃんのこと褒めてたよ!」

俺の言葉に笑顔でこたえてくれる。

「うちの妹いつもカバンにつけて学校行ってるよ!そうとう気に入ってくれたみたいでさ、」

「ずっとね、気になってたんだ・・・」

言葉に耳を傾ける。

久しぶりに聞くその一声一声がいとおしく感じた。

「喜んでもらえたかなって・・・よかった」

そういつて彼女は微笑んだ。

それだけで俺はもういいと思えた。

心のつつかえがひとつ取れたようなそんな風を感じた。

それからしばらくの沈黙のあと彼女は口を開いた。

「・・・私ね、転校するんだ」

「・・・今日聞いた」

「そっか」

風がそよぎ、草が揺れ、彼女の髪がなびく。

「お父さんとお母さんがずっと仲悪くてね、私お母さんと一緒に別のところに引っ越すの。わたしは転校なんてしたくないのに・・・」

俺は黙って話を聞く。

「クラスの友達ともお別れしたくないし、小鳥くんとだって仲良くなれると思ったのに・・・」

顔を伏せてうずくまった彼女の身体はわずかに震えていた。

「でも、私は子どもだから・・・お母さんについていくしかなくて・・・小鳥くんとも・・・たぶんもう会えない」

泣いてしまいそうだった。

ここで自分まで泣いてどうするんだと言い聞かせる。

「これさ、」

俺は右手に握りしめていたものを差し出す。

ひかりちゃんは顔を上げると手の甲で涙をぬぐった。

「ひかりちゃんにお礼がしたくて自分で作ったんだ、これでも精一杯やったんだけど・・・」

差し出したのはひかりちゃんのためにと俺が作った人形だった。

お前なんでそんなに不細工なんだよ・・・今くらいかっこよくしろよ・・・。

「・・・なにこれ？」

ひかりちゃんがそう言うのも当然なほど、俺の人形は何を目指して作ったのかわからないものだった。

お恥ずかしい。

「ひかりちゃん兎のマスコット持ってたから亀を作ろうと思ったんだけど・・・」

俺には難易度が高すぎたわけで。

「いろいろあってへびに」

するとひかりちゃんはくすくと笑った。

「ごめん、俺あんまり器用じゃなくて」

「ううん、私へび好きだよ。ちようだい」

そういつて笑顔で受け取ってくれた。

「これ、小鳥くんだと思って大切にするね」

俺の代わりがこんな不細工な人形でも全然いやではなく、むしろ嬉しく感じた。

「これで小鳥くんに会えなくても寂しくない・・・かな」

「そんなこと言わないでさ!・・・」

指を1本立てるのがこんなに恥ずかしいことだとは・・・。

「・・・また裁縫教えてよ」

そして俺たちは小指を絡めた。

そんなケーキの上に乗っているブルーベリーのように甘酸っぱくて、思い返すだけで赤面してしまうような過去が俺にもあったりするんです。

若いな、俺。

s c e n e 5 - 1 n o t t i t l e d

七瀬さんとは駅前でお別れ。

またねー、あしたねーつつて。

電車とバスで通学してるみたいだよ。

ケーキ美味かったなあ。

曜日によってケーキが変わるんだってさ、それに季節によっても変わるみたい。

ぜひまた行きたいよね、もちろん誰かを誘って。

次郎さんとのカフェもどきにも行きたいな。

あそこには七瀬さんと一緒に行こう。

自転車も手に入れたし今日は大満足だ。

「ただいまー」

上機嫌なせいで語尾に音符マークなんかついちゃってる気がするぞ。

靴を揃えて家にあがらせてもらおう。

たしか遙さんは帰りが遅いって言ってたな。

「加奈琉ー、いるー？」

リビングのドアを開ける。

「うぐっ」

その瞬間、頭に衝撃を受けた。

なんで頭の上から野球ボールが降ってくるのよ？

ボールにはマジックで何か書かれていた。

サインかな？

拾い上げてみると、

『天罰』

と物凄く達筆な字で書かれていた。

「くっ・・・くっくっ・・・」

するとすぐに俺の背後、階段の上からまるで“幼稚な畏に引つかかった間抜けなやつを見て必死に笑いをこらえている”ような声が聞こえてきた。

俺は即座に2塁への牽制の体勢に入る、投げないけど。

「ひゃっー！」

加奈琉だ。

階段の上で防御姿勢をとっている。

「なんなのこれ？」

片手でボールをお手玉する。

「罪に気づかないこともまた罪なのよ！よって今日の夕食の当番はコウちゃんになります！」

そう捨て台詞を吐いて加奈琉は自分の部屋へと消えてしまった。

・・・なんなの？

とりあえず俺が今やることは・・・・・・冷蔵庫の中身の確認だ。

「カーナーー、ご飯できたぞー」

2階の部屋にいる加奈琉に呼びかける。

ダダダダッ、スタツ！

「はやっ！」

「いただきます」

「・・・召し上がれ」

それから俺も席について食べ始めた。

「それでさ・・・俺何か悪いことした？」

「自分の胸に手を当てて考えてみなさい」

左手を胸に当ててみる。

「両方」

俺は言われた通りにする。

「って、おいっ！それ俺の春巻き！」

「これでチャラにしてあげる」

そう言っただけで勝手に春巻きを頬張る。

まあでも加奈琉が喜んでくれるならいいけど。

「ごちそうさまー、おいしかったよー！」

「で、結局なんだったの？」

「ん？もーいいよ、食器は私が洗うから置いておいて。料理と皿洗いは1日ずつ交代でよろしくね」

そう言っただけで加奈琉はリビングへと消えていった。

たゞくそやそやするんぞでちげじ・・・。

scene 6 - 1 目指せバラ色のスクールライフ

「うんうん・・・うん、すごく良いと思うわ」

「よかった、間に合った・・・」

「それじゃ、放課後までに人数分コピーよろしくね・・・って聞いているの？」

「・・・・・・・・・・」

「まあいいわ、私は先に行くからね」

高校生活がスタートして1ヶ月が経ち、この学校にもだいぶ慣れてきた。

その証拠にほら、目をつむっていても構内を自由自在に歩ける。

ガンッ。

「コウちゃん・・・教室のドアは自動ドアじゃないよ」

目を開けると加奈琉が不審者を見るような目でこちらを見ていた。

どんなかたちであれ加奈琉の瞳に自分が映っているのは誇らしい。

ここ天ノ宮高校に通うようになってから、俺はなんだかんだで加奈

琉と一緒に登校している。

クラスも違うし、加奈琉は部活（まともな活動をしているのかはあやしい）にも入っているので帰りは別だが。

そのせいでクラスの男子（天ノ宮中出身）に詰め寄られることがあったのだ。

なんでお前が月城と一緒に登校してるんだー！

とか、

お前らまさか付き合ってるとか言い出すんじゃないかなー！

とか。

要は、中学時代から加奈琉は男子にそれなりの人気があったらしい。

まあ俺は常套句

『ただの幼馴染だよ』

を巧みに使いこなしその場を切り抜けたわけだが。

もし一緒に住んでいるなんてことがばれたら、靴の中にささやかな画鋲のプレゼントが贈られてくるくらいじゃ済まない、そんな雰囲気だった。

じゃあね。

うん。

いつものやりとりをして教室前で加奈琉と別れる。

ガラスとドアを開けて窓際の後ろのほうに俺の席はある。

1ヶ月経つのに席はあれから変わっていない。

別に一生この席でもいいと思う・・・いや、卒業はしたいけど。

「小鳥くん、おはよー」

隣の席は七瀬さんだ。

朝からペダルをフル回転させてきた俺を一瞬で癒してくれるその笑顔。

はなまる。

「おはよう、七瀬さん」

実は七瀬さんとは同じ小学校に通っていた。

彼女は途中で転校してしまったのだが、それでも今はこうして再び同じ高校に通い仲の良いクラスメイトとなることができた。

なんか運命的なものを感じるよね。

え？うん、まだ熱中症とかそんな季節じゃないです。

クラスの中で親しい女子といったら七瀬さんとあとは、

「……小鳥くん」

「あ、咲坂さんおはよう」

咲坂さんくらいだ。

「……うん、この前読みたいてって言った本、これ」

「覚えててくれたんだ！？ありがとう」

彼女は加奈琉の友達でもあって、入学式のとくに加奈琉に紹介してもらった。

いつも包帯を体中にぐるぐる巻きにしている女の子。

毎日少しだけ巻く位置や長さが変わっているから本当にケガをしているわけじゃないんだろうけど……。

違いに気づくようになっただけでもずいぶん成長したかな。

最初はなかなか話しづらい雰囲気を持った人だと思っていたけれど、今ではこうして本を貸し借りする仲になっている。

それなりにクラスにも馴染んで、バラ色の高校生活に向けてまずまずなスタートを切れたんじゃないかな、と自己評価を試してみる。

scene 6 - 2 眠れる男じゅんじ

とじろじ、

「じいつはどーしちゃったの？」

後ろを振り返りながら尋ねる。

“こいつ”とは、俺の後ろの席に座っている男子、たのつえ田之上じゅんじだ。

じゅんごとは席が近いこともあってけっこう話したりするようになった。

そいつの様子が今日はおかしい。

ばったりと机にうつ伏せになって動かない。

大丈夫か、息してるよね？

「うん、なんかね、週末ずっと徹夜続きだったんだって。脚本書き上げるのに」

じゅんごは演劇部に所属している。

そーいえば今回は念願叶って自分が脚本を任せてもらえたって張り切っていたっけ。

「ほーう」

「寝かせておいてあげよう」

そつだな、起きたら起きたで騒がしくなりそうだし。

「お昼どうするー？」

「部室行こっ！」

午前中の授業が全て終わり、それぞれが昼食をとるために散ってゆく。

そんな中、後ろの席のじゅんごはあれから全く起きる気配がない。

生きてる・・・よね？

「おーい昼だぞー、飯食わないのかー？」

じゅんごの肩をゆすってみるが反応がない、まるでただの屍のようだ。

まあいいか、寝かせておこつ。

「七瀬さん、今日昼はどーするの？」

隣の席でまだ必死に黒板を書き写していた七瀬さんに話しかける。

「今日は自分でお弁当作ってきたの、友達と作ったお弁当見せ合おうって話をしてて」

へえー、七瀬さんの手作り弁当かあ、すごく興味をそそられる。

かわいい弁当なんだろうなあ、絶対りんごはウサギに、ウインナーはタクコさんに化けてるよね。

っと、俺はどうしようかな。

そこに教室を出て行くこととする咲坂さんを見つけた。

「咲坂さん！」

俺は咲坂さん呼び止める。

いつも昼休みになると気づいたら姿が消えている咲坂さん、どこで昼ごはんを食べているんだろうと少し気になっていた。

たまには彼女を昼ごはんに誘ってみてもいいよね？

俺は財布を持って立ち上がった。

「これからお昼でしょ？」

「・・・うん」

最初は話しづらい人なのかと思っていたのだけれどそんなことは一切なく、むしろ咲坂さんは他の女子と違って気軽に食事に誘えるよ
うなそんな感じだ。

「もし咲坂さんひとりなら一緒にしてもいい？」

「・・・いいよ」

ここで突然ですが最近気づいたこと発表していいかな？

咲坂さんって、実は隠れ美少女だよね。

文字通り片目は包帯で隠れているんだけど、眼鏡を外したら可愛かったみたいないき前の感覚で。

身体も細くてスタイルいいし（胸はないけど）、肌も白くてキレイだ（包帯のおかげ？）。

「いつもどこでお昼たべてるの？」

「・・・だいたいいつもB食だよ」

A食で見かけないと思ったらB食でお昼をお召し上がりになっていらしたのか。

この学校には食堂が2つある、学食Aと学食Bだ。

俺まだ一度もB食で食べたことなかったなあ。

「B食で食べたことないんだ、案内してよ」

「・・・うん」

今、少し笑った・・・かな？

scene 6 - 3 冷ややかな視線再び

「そーいえばさあ、今度の演目って結局どうなるんだろうね」

「うーん、田之上くん必死に書いてるみたいだけどそろそろ練習始めないとマズいよね」

ガチャガチャ。

「あれ？」

「どしたん？」

「なんかカギかかっている」

「え、いつも普通に開いてるよね？あ、でも私カギあるから」

ガチャツ、ギー。

「なんで閉まっていたんだろ？」

「てか、窓は開けっ放しじゃん！」

「まあそれより、早くご飯たべよう」

放課後、俺は先生への用事を済ませ職員室から教室へと向かった。

どーでもいいことだけど、あれからじゅんごは一度も起きる気配すら見せなかった。

それでよく先生たちから注意を受けないものだ途中からはもうなんか尊敬すら抱きそうになっていた、あぶないあぶない。

授業も終わったのでさっき無理やり叩き起こしてから教室をでてきたのだが……。

さすがにもう帰っただろうと思いつつ教室のドアを開けた。

うっ、まだいたのかよ。

そこには机に座ったまま頭を抱えているじゅんごの姿があった。

放課後の教室にひとり待っていてくれるのが女の子ならともかく、ガラスと開けた教室のドアの向こうに男を見つけても何にも嬉しくない。

俺はスタスタとじゅんごの横を通り過ぎる。

「ないんだ」

じゅんごがつぶやく。

「何が」

椅子に座りバッグに荷物をまとめる。

「脚本が・・・俺が死ぬ気で書いてきた脚本があー!!」

そう悲鳴のごとく叫ぶと、ガクツと頭を机の上にふせた。

「そっか、早く見つかることを願ってるよ、それじゃ」

バッグを肩にかけ、再びじゅんごの横を無言で通り過ぎようとした。

が、そのとき突然体が前に進まなくなった。

見ると俺の腕をじゅんごががちりと掴んでいる。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

一瞬の沈黙。

グラウンドで部活をしている生徒の掛け声が教室にまで届いてくる。

「小鳥」

「いやだ」

じゅんごの手を振り解こうとするが・・・・・・・・くっ、とれない。

「まだ何も言っとらんだろうが」

「俺は忙しいんだよ」

ブンブンブン！

こいつ、意地でも俺の腕を離さないつもりだ。

「わかったわかった、一旦落ち着いて話そうよ（離そうよ）」

「ああそうだな、手荒なマネをしてすまなかったな」

わかってくれればいいんだ。

それじゃ、俺はこれで、

「って、いいかげん手離せよ！」

「離したら逃げるだろうが！」

「……コウちゃん何してるの？」

加奈琉が不審者を見るような目で教室の外から俺たちを覗き込んでいた。

1日に2度も不審者扱いされるとは……。

累積2回目ですごい退場していいですか？

scene 6 - 4 消えたプロローグ

俺の前を歩くふたり、じゅんごと加奈琉だ。

この組み合わせは滅多に見ない、というか加奈琉は隣のクラスだしね。

それにしても、じゅんごは今にも膝をついてしまいそうなほど足取りが重い。

徹夜して必死に書き上げた脚本をなくしたのが相当ショックなんだろう。

それに引き換え加奈琉の足取りはスキップでもしだすんじゃないだろうかと思うほど軽い。

好奇心が駄々漏れだ、少しは隠しましょう。

どうせまたこいつはおもしろい事件に出会った的な感覚で首を突っ込んできたに違いない。

そついうのはやめるべきだって言っているのに。

「どう考えてもあとは演劇部の部室しかないよね」

「どつして俺らも一緒に行く必要があるわけ？」

「いいでしょ！暇なんだから、帰宅部」

「勉強するんです」

バツ！

つて、そんな効果音がつく勢いでふたり同時に振り向かなくなつて・
・俺だつて勉強くらいするよ。

「悪いなふたりとも」

「田之上くんだっけ？いいのいいの、どうせ暇なんだから」

はあ・・・まあいいけど。

しばらく歩いて辿り着いたのは部室棟の1階だ。

ここは主に文化系の部活の部室が集まっている。

入学式のとくにダンボールを抱えて訪れた、加奈琉が所属しているらしいミス터리研(?)の部室とは違うところにある。

あちらはこことは違い、主に体育会系の部活の部室が集まっている。

そのため校舎とはつながっているものの、入り口は外から土足でも入れるような位置に造られている。

どうしてミス터리研の部室が体育会系の部活の集まる部室棟にあるかって？

いや、まずそんなまともに活動をしているかもあやしい部に部屋が与えられるだけでもありがたいことなんだと思う。

理由はそっちの部屋が余ってたからとかそんなのだろう。

俺たちは『演劇部』と書かれたプレートをついたドアの前で立ち止まった。

「ここよね？」

「ああ」

そう言ってじゅんごは部屋のドアをノックした。

「はい」

中から聞こえてきたのは女性の声。

「失礼します」

ドアを開け、まずはじゅんごが入る。

俺は意外にも礼儀みたいなものがすっかりとっていたことに少し驚いた。

じゅんごがってわけじゃなくて部としてのの。

やっぱり男女が混合している部活ではノックは当たり前なのかな。

正直、文化系の部はもつとゆるいものかと思つてただけれど、実は知られざる厳しい先輩後輩の縦の関係があつたりして。

覗き込んだ室内はすぐきれいに片付けられていた。

椅子に座つてプリントの束に視線を落としている女子生徒が俺らの2つ上の先輩、ようするに3年生。

学年別に色分けされた上履きでわかつたりする。

そしてもうひとり女子生徒は天ノ宮中のほうの生徒だ。

こちらは一目瞭然、制服を見ればわかる。

ここ天ノ宮高校と同じ敷地内に天ノ宮中学というものがあり、簡単に行き来することができる。

まあ、用がない限り滅多にそちらへ赴くことはないのだが。

そして、人数の少ない部活によっては高校の生徒と中学の生徒で一緒に活動しているところもあるのだ、演劇部もまた然り。

「おお、やっときたね」

椅子に座っていた先輩が顔をあげた。

「あら、お客さん？」

そして俺たちと目が合うと、近づいてきて俺と加奈琉の腕を掴んで部室の中に引つ張り込んだ。

「どうぞ、入って入って！」

なんか初対面なのに壁のない明るいい人だ、演劇部ってこういう人ばかりなのだろうか。

「あー、部長、そいつら入部希望者じゃないですよ」

「え、そうなの？」

それを聞いてどうやら演劇部の部長らしい先輩は掴んでいた俺たちの腕を離れた。

「まあ、せつかく部室の掃除したからお茶でもどうぞ」

言われるがまま俺と加奈琉は座らされた。

「びっぞ」

そこへもうひとりの女の子が麦茶を入れて持ってきてくれた。

「一応この子からしたら俺も先輩にあたるのかな。」

「田之上くん、紹介、紹介」

そつ部長に笑顔で急かされ、じゅんごがふたりを紹介してくれた。

「えつと、こちらが演劇部部長の野宮美耶子先輩のみやみやこでそっちが後輩の綾瀬夏帆だあやせかほ」

夏帆ちゃんがぺこっとお辞儀をする。

「で、このふたりは……」

「月城です。で、こっちが小鳥幸太郎」

「月城さんと小鳥くんね、ところでふたりとも演劇に興味ないかしら？」

「ないです！とは言えるわけもなく、苦笑い。」

「部長！こいつらは俺の脚本を捜すのに付き合ってくれただけですって」

「冗談よお、というか脚本ってこれでしょ？部室に忘れてたわよ」

野宮先輩は本棚の上に置かれていた紙の束をじゅんごに手渡す。

じゅんごはそれを受け取るとパラパラと一枚一枚めくり始めた。

「それ脚本？見つかったの？」

加奈琉の問いにじゅんごの表情が曇りだす。

「ああ、たしかに俺の書いた脚本なんだが……枚数が足りない」

scene 6 - 5 演劇部に残された遺産

前回のあらすじー

徹夜までして必死で仕上げた脚本がないと言い出したクラスメイトの田之上じゅんごに巻き込まれ一緒に脚本を捜すことに。

なぜか関係のない加奈琉までパーティーに加えて、目指すは演劇部
部室！

そこに現れたのは演劇部の長である野宮先輩と天ノ宮中の生徒の夏帆ちゃん。

そこで無事お目当てのアイテム『徹夜で仕上げた脚本』を手に入れた俺たち。

見事ハッピーエンドを迎えるかと思われた矢先にじゅんごの口から出た言葉、

「枚数が足りない」

そう、脚本はこれで全てではなかったのだ。

世界中に散らばった脚本を全て集めるまで俺たちの旅は終わらない、つづく。

最後は嘘だけど。

じゅんごは野宮先輩をすぎるような目で見つめた。

「えっ、でもここにはそれだけしかなかったわよ、・・・ねえ？」

そう言っつて、夏帆ちゃんに同意を求める。

「は、はいっ」

「もしかしてですけど、掃除してるときに間違えて捨てちゃった・・・とか」

加奈琉の言う通り、たしかにそれは十分にありえるかも。

じゅんごの表情が曇る。

しかしその考えはすぐに否定された。

「そ、それはないと思います」

「そうね、間違えて捨てないように脚本だけは私がちゃんと別の場所に置いておいたし、それからは誰もさわってない、掃除していたのも私たちふたりだけだしね」

「それじゃ、その前からなくなっていたってことですか」

なんだか考え込む様子の加奈琉。

推理オタクな部分が徐々に始めている、よろしくないな・・・。

「もう練習を始めないと間に合わなくなるし、このまま見つからないようなら田之上くんには悪いんだけど今回は元々公演する予定だ

った脚本で……」

しばらく考えて発した野宮先輩の言葉をじゅんごが遮った。

「部長！1日だけください、明日の放課後までに書き直してこられなかったらきつぱり諦めます！」

そう言つて、じゅんごは残された脚本を持って部室を飛び出していった。

相当気合入っていたからなあ、その分ショックも大きいのだろう。

じゅんごがいなくなつてしまったために部外者の俺と加奈琉だけが残されるという形になつてしまった。

そんな俺たちの正面に野宮先輩が座り、その隣に夏帆ちゃんが座つた。

「気の毒だけど仕方がないの、期限を引き延ばして今日まで待つたんだけどこれ以上はね、公演に間に合わなくなつちゃうから」

次の公演、たぶん創立祭だろう。

創立祭は我が天ノ宮高校の中でも学園祭に並ぶ大きなイベントだ。

そーいえば、

「あの一、さっき言つてた元々の脚本って何なんですか？」

「ああ、それはね、えつと・・・これなんだけど」

野宮先輩はバッグから冊子を取り出して、俺たちに見せてくれた。

「去年まで演劇部にいた先輩が書いたものなの」

加奈琉はそれを手に取ると熱心に目を通して見る。

まるで何か変なスイッチでも入ってしまったかのように。

「去年、先輩たちの最後の公演のとき、2つの脚本を別々のふたりの先輩が書いてきてね、どちらをやるかでもめたんだけど、結局部員の多数決になってできなかったのがその脚本」

へえー。

「その脚本を書いた先輩が“この脚本はお前らに預ける、来年こそは演じてくれ！”って私たち後輩に残していった、いわば遺産みたいなものね」

「そんな大事そうなもの、端から放っておいちゃマズいんじゃないですか？」

「大丈夫、大丈夫、今年の公演の場はこれつきりじゃないんだから」

「はあ・・・」

最後に俺と加奈琉は声を揃えたのだった。

scene 6 - 6 推理と想像は紙一重

それから俺たちは部室を後にして帰路へとついた。

夕暮れの中自転車を押したままふたり並んで歩いている。

けっこう部室に長居をしてしまったが、迷惑ではなかっただろうか。
ちよつと心配だ。

「コウちゃんはどう思う?」

「どう思つて何が?」

そう俺が聞き返すと、加奈琉は拗ねたように口先を尖らせてから、

「田之上くんの書いた脚本を盗んだ犯人は誰かって話」

と言った。

いやいや加奈琉さん、犯人がいるかどうかもわかりませんよ。

「如月くんならあつという間に謎を解いちゃうんだろつなあ」

だろつね、ドラマの話だけだ。

「あいつがどこかで無くしたか、部室を掃除したときに間違えて捨てちゃったんじゃないかな?」

.....。

そんなあからさまに呆れた顔をしなくたって。

「聞いてなかったの？野宮先輩が掃除を始める前から枚数が足りない状態だったって言ってたでしょ」

バラバラに置かれていて見落としていた可能性だってあるじゃないか、一日中部室にあったなら誰にだってふれられるチャンスがあるし。

言わないけど。

「じゃあ、じゅんごが自分でどこかに無くした、あいつ徹夜で意識もろろつとしてたし」

「いや」

加奈琉は首を左右にぶんぶんと振った。

「甘いね、コウちゃんは甘い、この事件には3つの線が考えられます」

おいおい、

「事件て・・・」

今度はこっちが呆れた顔を返してやる番だ。

「1つ目は、去年先輩が書いた脚本を読んで、ひどく気に入った後輩のひとりがどうしても去年多数決で負けてできなかった脚本を演じたいという理由から、田之上くんの脚本を盗んでしまった。2つ目は、来年こそはと信じて後輩に自分の脚本を渡した先輩が、田之上くんの書いた脚本によって自分の脚本が使われなくなるのを恐れて誰かに盗ませた」

ほほう。

「3つ目は？」

「実は野宮先輩が超ドSで田之上くんをいじめて楽しんでいる」

「先帰る」

俺は自転車のペダルに足をかけ、こぎ始める。

「冗談だってー！」

こつこつのも悪くない。

背中から聞こえてくる加奈琉の声。

推理と想像は紙一重だ。

scene 6 - 7 恐るべき情報網

「1日だけ時間もらってもいい?」

「わかった、また明日ここで待ってるから」

「うん」

「・・・そ、それじゃ」

本日もまた清々しい自転車通学をしてきた俺。

自分のクラスである1・Dの教室のドアを開ける。

教室のドアが手動なのは周知の事実、同じ過ちは繰り返さない。

「新聞部です!」

「うひえっ!?!」

教室のドアを開けた瞬間、待ち伏せしていたように人が飛び出してきた。

マジでこっぴつこのやめてください、変な声とか出るんで、汗。

「新聞部です!」

そう言うクラスメイトはメモ帳とペンを持って詰め寄ってくる。

「いや、浅倉さんが新聞部なのは知ってるけど」

浅倉千鶴、同じクラスの新聞部の女子だ。

まだあんまり話したことがないんだよなあ。

とりあえず自分の席に着くと、浅倉さんはじゅんごの席からイスを引っ張ってきて座った。

「聞いたよ！演劇部の脚本が何者かによって盗まれたんだってね？」

は！？昨日の今日だぞ、どこからそんなこと聞いたんだよ。

「何で知ってるの？ってか盗まれたと決まったわけじゃないから」

「私の情報網をなめないでよね、小鳥くんの秘密だって知ってるんだから」

浅倉さんはニヤリと笑った。

「・・・オレノヒミツツテナニヨ？」

ほら、言っつていらん？

周りをきよろきよろと見回してから耳打ちをした。

「小鳥くんさあー、C組の月城さんと同じ家に住んでるよね」

ギクッ。

「どうしてそれを・・・」

「私の情報網をなめないでって言ったじゃない、まあそれはいいとして」

いや、全然よくないんですけど。

「この事件について何か知ってることないの？」

あんたが俺と加奈琉が同じところに住んでいるのを知ってることのほうが事件だよ。

「ないよ、情報通の浅倉さんでさえ知らないことを俺が知ってるわけないかと」

「本当に？何か隠してたらさっきのことクラスのみんなにばらすよ、特に男子に」

たいして話したこともないクラスメイトに弱みを握られてるやつがあるかよ！

「べ、別にそんなのばれても全然問題ないんだからっ」

「ふーん」

立場は対当じゃないと良い友好関係は築けないからね、うん。

すると浅倉さんは立ち上がりスーツと息を吸い込んだ、これから大

声でも出すかのよう・・・な!?

「小鳥くんってー!!実はー!!こぐうっ・・・」

俺は慌てて浅倉さんの口を後ろから押さえる。

何してるのかなこの子は!?まったくもう、まったく!

俺が加奈琉と一緒に住んでるのは禁句でしょ!

そんなことここで言ったら俺どうなんのよ!無事に生きて帰れるのかな?かな?

「そ、そーゆーのはやめようよ!小学生じゃないんだから!」

「ん・・・んー」

「あ、ごめん」

あまりに突拍子もないことをするもんだから慌てて浅倉さんの口を押さえていた手を離す。

「もう・・・小鳥つてば、だいたん?」

教室中の生徒が俺たちに注目していた、七瀬さんも・・・。

「ハートマークつけるのやめい」

俺はさっさと座って窓の外へと顔をそらした。

今日もいい天気だ。

scene 6 - 8 犯人の存在

その日じゅんごは遅刻ぎりぎりです教室に現れた。

「あ、ようやく主演のお出ましね」

そう言つて浅倉さんはじゅんごの方へと駆け寄つていった。

「田之上くん、ちょっとインタビューいい？」

じゅんごは疲れた様子でどかっといすに座ると、バッグから原稿用紙を取り出す。

「時間がないんだ、悪いな」

するとそこでチャイムが鳴った。

タイミングよく先生もドアを開けて入ってくる。

それを見た浅倉さんはしぶしぶ自分の席へと戻つていった。

昼休みになり俺はじゅんごこと机を向かい合わせ昼飯を食べていた。

とはいえ、じゅんごはさっさと昼飯を済ませると原稿用紙のマスを埋める作業へと戻つてしまったのでそれを見ながら俺は朝買つておいたパンにかぶりついている。

「それでどうなの？何か考えついたの？」

そして普段なら一緒に昼飯なんて食べない加奈琉が、なぜか俺たちのクラスに乗り込んできて机を向かい合わせている。

「いや別に」

じゅんごの脚本がなくなったことについて聞いてきているんだろう。

「はぁ・・・一晩考えて何にも出てこないなんて見損なつたよ、」
「ウちゃん」

見損なうのは自由だが、理由が釈然としないのはなんともしっくりいかない。

「考えたもなにも、どれだけ俺のこと買いかぶってたのよ？」

「昔はもっとさ、こういうことには熱かったのに」

昔って小学校上がる以前の話だよね？

「さいですか」

まあ、その話は教室の隅のほうにでも置いておいて。

「なあ、それってなくなった部分だけ書き直せばいいんでしょ？」

「そう簡単に言ってくれるな、なくなったのは最初の部分なんだがつながりもあるし、そもそも内容を全部覚えてるわけじゃない、それに納得のいくものでなければ出したくはないしな」

大変そうだなあ、トラブルがあったからといって中途半端なものは出せない、じゅんごの演劇に対する熱いものが伝わってきた。

「けっこんな枚数なくなってたのか？」

「・・・まあな」

そこへガラツと大きな音を立てて浅倉さんが入ってきた。

休み時間のたびに教室を飛び出していき、昼休みになるやいやな姿を消したと思っていたら、

「号外です！」

浅倉さんは教室にいる生徒たち一人ひとりに校内新聞を配っていく。

「どっぞ」

俺もそれを受け取り目を通す。

仕事早すぎでしょ、そこはもう新聞部員としての浅倉さんの力量を褒めるほかない。

そこにはなくなっただじゅんごの脚本のことが記事として取り上げられていた。

『消えたプロローグ！犯人の目的は！？』

なんかもう犯人がいる前提で話が広がってしまっている。

実際のところ当の本人はどうなんだろう。

「なんか、色々大げさに書かれてるけど、じゅんごは犯人がいると思ってる?」

「どうだかな、俺自身昨日の記憶が曖昧だから何とも言えんが、もし仮に犯人がいたとしたら全部持っていわずに中途半端に置いていく理由がわからん」

たしかに。

scene 6 - 9 跳躍力に長ける

「ねえ、これどう思う?」

一生懸命に記事を読んでいた加奈琉が口を開いた。

黙って文字を追っている加奈琉は本当に絵になる。

そのまま雑誌の表紙でも飾れそうくらい。

もうずっと本でも読みながら生活したらいいよ。

で、なんだっけ?

「演劇部女子部員2名の証言、昼休みにお昼ご飯を部室で食べようと向かったさい、普段かかっている部室のカギがかかっていた。しかし、中に入ってみると窓は開いていた。部室にカギをかけるのは学校に来ない休日のみ」

加奈琉は記事を読み上げる。

「おつちよこちよいの話?」

ドアのカギは閉めたのに窓閉め忘れてましたー、えへへ みたいな。

「部室は職員室にあるマスターキーでは開け閉めできず、演劇部で合カギを持っているのは高校の2・3年生のみ。3年生2名、2年生3名、よって部室のカギは全部で5つ、もちろん中からは合カギなんて使わずにカギをかけられる」

ふむふむ。

「それで？」

「意味もなく部員の誰かが外からカギをかけるはずないから、やっぱり脚本を盗んだ犯人がいて中からカギをかけたんだよ」

力説する加奈琉。

まあ、カギがかかったことと犯人がいることには何の関係性もないと思うけど。

「持ち去るだけならカギなんてかける必要ないんじゃない？」

「探してる脚本がすぐに見つかるとは限らないんだから、カギくらいかけてもおかしくないでしょ」

「うーん……」

「それで無事犯人はお目当てのものを見つけ出したんだけど、そのときちよつど女子部員のふたりがお昼を食べに部室にきて慌てた犯人は窓から中庭へと逃げた」

「どうよ!??と言わんばかりの表情。」

「否定はしないけど、どうして脚本を全部持っていかなかったのが引つかかる」

「それは……」

考え込む加奈琉。

考えているときの真剣な表情の加奈琉もこれまた絵になる。

加奈琉にミステリー小説読ませたら最強なんじゃないだろうか。

てか、そーいうのはいつも読んでるね、“推理おたくの幼馴染”っていうのが俺の中での加奈琉だし。

「慌てていたから持っていきそこねた・・・とか」

「なくはないけど苦しいな」

「じゃあコウちゃんはどっか思ってるの!?!」

おいら?!

なんとも思っていないよ・・・なんて言ったら怒られるよな。

どうしよ・・・。

「そっちなあ・・・ネ」

「「ネコ!?!」」

黙々とペンを走らせていたじゅんごも一緒になって俺のほうを見る。

「その開いていたっていう窓からネコが入ってきて偶然ドアのカギ

を閉めてしまった。その後、じゅんごの書いた脚本をくわえて窓から出て行った。脚本の一部分だけがなくなっていたのはネコが全部をくわえて持ち出すのは不可能だったから」

「なんでネコが脚本持っていくのよ？」

「原稿用紙に魚のにおいでもついてたんじゃない？じゅんごの家の一昨日の夕食は？」

「冗談だろ？」

「うん、冗談だよ、ごめん」

するとじゅんごはため息をついて作業へと戻っていった。

加奈琉も呆れた様子で机を元に戻すと自分のクラスへと帰って行ってしまった。

いいじゃんネコだって、ネコ可愛いじゃん！

そろそろ机を戻す。

「あれ、どーしたの？小鳥くん、元気ない？」

昼ごはんを済ませて戻ってきた七瀬さんだ。

「ちよー元気！」

七瀬さんに気遣われた瞬間にHP全回復です、はい。

「そ、そっか」

そんな照れながら微笑んだ表情がすごくまる。

scene 6 - 10 帰宅部の活動

キンコーン……

本日の授業終了を告げるチャイムになる。

と同時に後ろから断末魔が聞こえてきた。

「だぁーっ!!」

そして頭を思い切り机にうちつけたような鈍い音が響いた。

「どづした、うるさいぞ」

さて、さっさと教科書をしまつて帰る準備帰る準備つと。

「……だめだ、終わらなかった」

「田之上くん」

その聞き覚えのある声に振り向くと、授業が終わったばかりだとい
うのに隣のクラスにいるはずの加奈琉がそこに立っていた。

「田之上くん、元気出して！公演は今回だけじゃないんでしょ？次
回までじっくり練り直してもっといいもの作ればいいじゃない！」

そう言って加奈琉はじゅんごの両肩を後ろからポンとたたく。

じゅんご、加奈琉になぐさめてもらえるなんて羨ましいことだぞ！

見てみる、このクラス中の男子（天ノ宮中出身）の羨望の眼差しを。いつまでも加奈琉になくさめてもらえばなしじゃ後が怖いぞ？

羨望の眼差しが妬みの眼差しに変わるのなんて時間の問題・・・

「そうだよな、チャンスは今回だけじゃないからな」

じゅんごはのっそりと上半身を起こした。

「立ち直り早いな」

これも美少女補正だろうか？

「そうだよ、その意気だよ！さあ部活へ行こう！」

そして、加奈琉がもう一度両肩をバンと叩くと、じゅんごは立ち上がった。

「よし、練習が始まれば今度は俺も役者だからな、いつまでも落ち込んではいられん」

加奈琉が何度も頷く。

「それでさ、田之上くん」

「なんだ？」

そう言ってじゅんごは加奈琉の方を振り返る。

「今日から次回公演の練習なんだよね、見学しに行ってもいい？」
手を合わせながら上目遣いをお願いする美少女。

こんなの断れるやつがいたら尊敬する。

「それは全然かまわないぞ、部長も喜ぶと思うしな」

「やったあ」

よかったな加奈琉。

「コウちゃん！なんでこっそり帰ろうとしてるの」

「へ？」

授業オワツタラ大人シク帰宅スル、コレ帰宅部ノ鉄則ネ。

そして俺は今演劇部の部室の前まできている。

あれ、なんか最近帰宅部の活動が何者かの手によって阻害されてる
気がするぞ？

コンコン。

「どつぞー」

「失礼します」

ドアを開けてじゅんごは部屋の中へと消えていった。

部室には残りの部員全員がすでにそろっていた。

皆、じゅんごの顔を見ると一瞬不安そうな顔になる。

脚本をなくしてショックを受けているであろうじゅんごのことが心配なのだ。

その間、俺と加奈琉は部室の外で壁にもたれて並んで立っていた。

「あいつちょっと無理してたね」

「やっぱり」

「でも、ありがとう加奈琉」

scene 6 - 11 気持ちを切り替えて

「いいんですか先輩!？」

その声を張り上げたのは演劇部の男子である和泉いずみだった。

彼は天ノ宮中の生徒で、じゅんごの後輩にあたる。

「ああ、今回脚本をなくしてしまったのも、きちんと管理していなかった俺の責任だ」

そうじゅんごは冷静にこたえる。

「そんな・・・あんなに頑張っていたのに、部長、せめてあと1日待てませんか!？」

そう言つて和泉はさすがの様な目で野宮先輩を見た。

「さすがにこれ以上はね・・・」

しかし、さすがにこれ以上待つのは練習期間が足りなくなってしまうこともあり、困った表情を見せる。

「そうだぞ、俺がこう言うのもなんだがあまり部長を困らせるな」

「それなら・・・それならこれはどうですか!？元々の脚本で練習は始めます、でもあと数日で田上先輩が脚本を仕上げられたら・・・」

「

「和泉！そんな脚本が途中で代わるかもしれない状況じゃ練習にも身が入らんだろ、それに俺だって今日からは役者として練習に参加する、台詞を覚えるために自分の脚本のことは公演が終わるまで忘れるつもりだ」

「そんな・・・」

がつくりと肩をおとした和泉に、他のメンバーの表情も曇る。

パンパンッ！！

そんな中、野宮先輩が手をたたいて注目を集める。

「まあ、そんな暗い顔しないで」

そんなやり取りを俺と加奈琉は部室の外で聞いていた。

部室から野宮先輩の声が聞こえてくる。

「気持ち切り替えて頑張りましょ！」

ほんとうにじゅんごの書いた脚本はどこへ消えてしまったのだろうか。

そんなことを思っていると部室のドアが開きじゅんごが顔をだしてきた。

「ふたりとも待たせてしまって悪いな、これから講堂に行つてそこで練習だから先に行つて待っていてくれ」

「う、うん」

そして俺と加奈琉は演劇部の練習を見せてもらうために講堂へと向かった。

講堂についた俺たちは隣り合ったイスに腰掛け、練習をぼんやりと眺めていた。

練習が始まってしばらくすると加奈琉が話しかけてきた。

「色々あった予測の中にね、演劇部が注目を浴びて客を集めるための自作自演なんじゃないかっていうのがあったんだけど」

「そんなの・・・」

「ないな」

「だよな」

「もしそうだとしたらじゅんごがああまでして脚本を書き直そうとする必要もないしね」

「ん？」

さつきからぼんやりと練習をながめていたのだが、なにやら様子がおかしい。

「夏帆ちゃん、夏帆ちゃん」

「はいっ！」

野宮先輩の呼びかけに慌てた様子で返事をかえす夏帆ちゃん。

「次、夏帆ちゃんの台詞よ？」

「す、すみません」

そう言いながら頭をさげる。

それを見て、他の部員たちは顔を見合わせている。

「大丈夫？なんかぼーっとしてるみたいけど」

心配そうに尋ねる野宮先輩に夏帆ちゃんはブンブンと手を振った。

「全然平気です、すみませんでした」

なんだろう、実は練習が始まってからこういう場面が何度かあるのだ。

「なんかあの子様子おかしくない？」

「夏帆ちゃんだっけ、ぼーっとしてるというか心ここに在らずみたいな」

野宮先輩は脚本をパタンと閉じた。

「一旦休憩にしましょ」

練習が中断されると同時に加奈琉が立ち上がった。

「私たちはそろそろ帰ろっか」

それに続いて俺も立ち上がり、目の合った野宮先輩に頭を下げその場をあとにした。

scene 6 - 12 意外とあっさり

「ごめんなさい、待たせちゃって」

「ううん、それより大丈夫？俺のせいだよね」

「違うの！別にそんな・・・」

今日も相変わらず教室は騒がしい。

クラスのアイドル（俺認定）七瀬さんが登校してくるのを待ちながらじゅんごと話をしていると、クラスメイトの男子が近づいてきた。

「田之上、用があるって先輩が来てるよ」

そう言って彼はドアの方を指差した。

そこには演劇部の部長である野宮先輩が立っていた。

「どづしたんですか？」

「あつたのよ」

「何がですか？」

「いねよー」

「ジャジャーン」と言わんばかりに背中に隠していたものをじゅんじゅんに見せた。

「なくしてた脚本！え、どうして……」

「わからないんだけど、今朝部室に行ったらテーブルの上に置いてあったの、ところで残りの脚本は？」

「えっと、部室のロッカーに」

「それじゃ、合わせて昼休みにでも人数分コピーしておいて、よくわからないけど見つかってよかったわ」

見つかった脚本をじゅんじゅんに手渡すと、肩をポンとたたいて去っていった。

渡された紙の束を持ってじゅんじゅんが戻ってくる。

「それって」

「ああ、脚本が見つかった」

えーっ！？そんなあっさりと！てか、どうしてこいつはこんなに落ち着いているんだ。

「それで全部そろったの？」

そう聞くとじゅんじゅんは慌てて枚数を数えた。

「なくなっていた分これで全部だ」

なんだ、それなら良かったじゃないか、でもどつして急に出てきたんだろ？

「……どこか書き換えられてたり」

ぺらぺらとめくりながら確認していく。

「大丈夫……みたいだ」

それならなんなんだ、どつして一度持ち出してから今になって返す必要がある？

それとも親切な誰かが拾って届けてくれたのかな？

「ちょっと見せてもらっていい？」

じゅんごから脚本を受け取り眺めてみる。

ん！？

「どつした？」

「おはよー小鳥くん、と田之上くん」

そこへ七瀬さんが少し遅めの登校をしてきた。

彼女が来ただけで教室の雰囲気有一段と明るくなる。

俺の心にも穏やかなお花畑が広がり、今考えていたことなどあつと

いつ間に消し飛んでしまっていた。

scene 6 - 13 下の紙にうつるといっあれ

無事脚本が見つかった日の昼休み、俺はじゅんごに演劇部員の人数分のコピーをとる作業を手伝わされていた。

ここが重要で俺が自ら手伝う意思を示したわけではないのに、授業終了のチャイムが鳴ると同時に有無を言わず腕を掴まれここまで連れてこられたのだ。

クラスメイト（主に咲坂さんや七瀬さん）との親睦を深める大きなチャンスであるお昼ご飯の時間を潰すとはこの田之上じゅんごという男、なんてけしからんやつだ。

まあこの貸しはいつかきっちり返してもらおう、覚えとけっ！

って、そんな俺は心の狭い人間じゃないさ、友人の為ならいつだって力を貸すさ、いや本当に。

「おい、手が止まってるぞ」

ぶーぶー、せつかく人がなけなしの善意を披露してるのに！。

「ねえ」

「なんだ？」

俺の問いかけにも手を休めずに聞き返してくる。

「綾瀬” って、あの天ノ宮中の女の子だったよね？」

「ああ、演劇部の中等部で女子はまだ綾瀬しかいないからな、綾瀬がどうかしたか？」

「いや、うーん・・・部の中で彼女のことをさん付けで呼ぶ人って何人いる？」

「それは同じく中等部の和泉っていう男子だけだな」

あの、じゅんごの脚本を元々の脚本に代えることを最後まで拒んでいた男子か。

「そっか」

するとじゅんごは作業の手を止めた。

「なんだ？さっきから、はっきり言ってくれ」

うっ・・・食いつかれたくなかったんだけどなあ。

「えっと、じゃあじゅんごの書いた脚本の1枚目を見てみて」

コピーをとり終え、横に置いてあったそれを手に取るじゅんご。

そして俺はそのある一点を指で示す。

「1111」

「ん？」

「上で何かを書いたんだと思うけど、“綾瀬さんへ”って文字がうつってる」

そう、ペンで文字を書いたりしたとき筆圧が強いと下の紙にまで跡が残ってしまうあれ。

あれってなんていうんだっけ？

己のボキャブラリーの少なさにちよつとがっかり。

「たしかに、だがこんなものよく見つけたな」

別に俺が人並み外れた注意力を持ち合わせているわけでも、他人が引くほどカンが鋭いわけではない。

気づくときには気づくのだ、ただそれだけ。

要は運、頭を使う問題を出されて瞬間ひらめくこともあれば永遠悩むこともある。

「これは“想像”だから聞き流してもらってかまわないんだけど、なくなつた脚本の一部が直接部屋のテーブルに戻されていたってことは、それを故意に持ち出した人がいる可能性が高いと思う。それで思つただけど、その人はその1枚目に残つた文字の跡を見られなくなくて持ち出したんじゃないかな？」

本当はこんなことじゅんごに話すつもりはなかった。

単なる俺個人の幼稚な想像、探偵の真似事なんてしたくはなかった

から。

そんな才能がないことも自分自身がよくわかっているから。

「こんなの注意してみなけりゃ気づかんし、気づいてもなんとも思わんと思つが」

「他の人にはそうでも、その人にとってはそれくらい神経質になることだったのかも」

「なんだかよくわからんな」

「まあ俺の勝手な想像だよ」

笑ってくれてかまわない、ちょっと出すぎた真似だった。

そしたら俺も笑い返してそれで終わり。

こうして脚本も戻ってきて全て解決してるんだから、今さらああだこうだ言う必要なんてないんだ。

俺はコピーをとる作業に戻る。

「お前のその“想像”にはまだ続きがあるんじゃないか？」

「ああ、でも何の根拠もないただの辻褃合わせだよ」

「わかってる、あくまでお前の勝手な“想像”として聞く、話してくれ」

うーん・・・確かな証拠もないのに憶測だけで物事を語るっていうのは俺には少し抵抗があつてなんというか、そうあまり気が進まない。

探偵ドラマで最後に犯人を追い詰めていくシーンであれだけ流暢に話せるのは、確固たる自信とその元となる確実な証拠があるからなんだとつくづく思う。

証拠もないのに自分の想像に近い推理だけをべらべらと披露する探偵はいないのだ。

「綾瀬さんへ」ってことはある人が綾瀬さん宛で手紙を書いていた、それがたまたま部室に置き忘れていた脚本の上だった」

「部長たちが掃除をするまで本当に散らかっていたからな」

「その人は書いている現場を見られたくなくてカギをかけていたし、知られたくなくて脚本を持ち去つたし、見つかりたくなくて窓から逃げた」

「なんで見つかりたくないのにわざわざ部室なんだ？」

その点についても少し考えていた。

例えば、その手紙を直接本人に渡すわけではなく部室にあった彼女のロッカーに入れておこうとした場合、脚本にうつってしまった文字の跡を気にするくらい心配性な人間だったら手紙を家から書いて持ってくる途中でどこかで落としたり学校でクラスメイトなんかに見られることを恐れて部室で書いていたんじゃないだろうか？

書き終えてすぐに夏帆ちゃんのロッカーに入れてしまえば誰にも見つかることなく最初に見つけるのは彼女だ。

でも、これではなんか苦しい。

「さあ、それは見当がつかないな、でもこうして今脚本が戻ってきたってことは、もうその1枚目にうつつた跡が見つかったかもかわらない状況になったのか、もしくは良心で返してきたか」

「そういえばさっき俺に聞いたな、綾瀬をさん付けで呼ぶやつがいるかって……」

そう、そのじゅんごの答えで俺の想像はふくらんでしまっていた、けれどそれは決して言葉にはしない、自分の中にとどめておけばいいのだ。

どうして2日後にこうして脚本が出てきたのか。

想像は推理とは違う。

憶測だけで物を言つて、濡れ衣を着せることにもなるかもしれない。自分が考えたことなんて所詮ひとつ、稀に天からひらめきが舞い降りてきてもせいぜいふたつくらいの角度からしか物事を見れていないんだと思う。

人並み外れた能力を持たない俺のような一般人なら尚更、自分の考えが正しいと思いついて突っ走るやつがいたらそれこそ最悪だ。

「さあ俺には・・・」

わからない、そう言いかけたがそれは第三者の言葉によって遮られた。

「すみません、田之上先輩！」

入り口のところで頭を下げていたのは、じゅんごの演劇部の後輩の和泉だった。

じゅんごは驚いた様子で振り返る。

「和泉！？いつからそこに・・・」

「ごめんなさい、コピーを手伝おうと思って・・・あと謝らなきゃいけないことも」

「何だ和泉、頭を上げる」

その言葉にようやく和泉は頭を上げた。

そして、

「実は・・・脚本を持ち出したの俺なんです」

scene 6 - 14 エピローグ

月日はちよつとだけ流れて創立祭当日。

校門には特設の大きなゲートが建ち、そこを抜けると生徒たちが運営するたくさんのお店が並んでいる。

にぎわう構内には生徒に混じって一般の人々の姿も多くみられる。

じゅんごの脚本をコピーしていた昼休み、あるとき後輩の和泉が話したのはこんなことだった。

脚本が消えたあの日の昼休み、和泉は部室で夏帆ちゃん宛の手紙を書いていた。

内容は思いを寄せている彼女に告白するために呼び出すためのものだった。

でも、それをすぐに渡すつもりはなくカギのかけられる部室の自分のロッカーに入れておいて、創立祭での公演後に告白しようと思っていたらしい。

念のため部室にカギをかけて手紙を書いていたところ、運悪く人が来てしまい、慌てた和泉は窓から逃げようとした。

しかし緊張で腕に力が入っていたせいか、下にあつた脚本に跡がくつきりとうつつていることに気づき、一部を一緒に持ち出してしまったのだそうだ。

後になってそれが次の公演のためにじゅんごが書き上げた脚本であることを知ると、一刻も早く返さなければと思うが、1枚目にうつってしまった文字から自分が想いを告げるよりも先にそのことがバレてしまうのを避けたかった和泉は、脚本を持ち出してしまったその日に夏帆ちゃんを呼び出すことを決意し、告白。

次の日返すことができれば何とかなるんじゃないかと思っていたのだが、夏帆ちゃんから返事を1日だけ待ってほしいと言われたことから、次の日になっても脚本を返すことができず、その後には及ぶというわけだ。

ここ体育館では今まさにその演劇部の公演が行われている。

もちろんじゅんごの書き上げた脚本で。

暗幕が引かれた薄暗い空間、俺の隣には加奈琉が座っている。

「そついえば前に脚本がなくなるってことがあったよね、あれって結局なんだったんだろ・・・」

実は加奈琉もその事件の真相は知らない。

「さあ？こうして無事に公演できてるんだからいいんじゃないの？」

結局、じゅんごは和泉から真相を聞いてもそれを誰にも言わず、事件は謎のまま終わりを迎えた。

そのことを新聞部の浅倉さんは残念がっていたみたいだけど。

「まあ、それにしてもあのふたりがこうやって恋人役を演じているなんてね」

それを聞いて俺は一瞬ドキッとした。

「わたし、夏帆ちゃんと和泉くんはお似合いだと思ってたのよね」

そう、驚いたことにふたりはその後うまくいっていたのだ。

結果オーライとでもいうのだろうか。

そのふたりを恋人役としてキャストに推薦したのはじゅんごの優しさからなのか、それともいたずら心からなのかは俺も想像しがたいところだ。

ステージ上では和泉と夏帆ちゃんが手を取り合い見つめ合っている。

「私は一生あなたのそばに居続けます」

「はい」

こうして全ての幕は閉じた。

「そしてふたりはいつまでも幸せに暮らすのでした」

そんな締めめのナレーションに俺、そして観客は心からの拍手を贈った。

scene 7 - 1 たくさんの人から信頼される、そんな人間になりたいよね

創立祭数週間前。

その日我がクラスでは創立祭での出し物及び実行委員を決めることとなった。

俺たちの担任教師である水沢先生（見た目は俺たちより幼い）が黒板の前に立ち指揮をふるっている。

「誰か実行委員さんに立候補する人はいませんか？」

静まり返った教室。

教室中が牽制し合い互いに様子をうかがっている。

そりゃそうだ、誰だってそんないかにも面倒くさそうな役やりたかない。

誰一人動かぬまま時間だけが過ぎてゆく。

「立候補してくれる正義感溢れる人はいませんか？」

.....

「立候補してくれる親切かつ勇気ある人はいませんか？」

.....先生、そこまで言うと逆に手挙げづらと思います。

いっこうに進まない状況に先生は溜め息をついた。

「仕方ないですね、それじゃ適任だと思う人を推薦してください……」

「そう言い終わるか終わらないかで一斉に手が挙がった。」

足並み揃えて（足は上げてないけど）手を挙げたのは男子、それも天ノ宮中出身のやつらだ。

「小鳥くんがすごく適任だと思われそうです！」

「俺も小鳥くんが適任中の適任だと思います！」

「彼以外いないでしょ！」

「創立祭実行委員に関して小鳥くんの右に出る者も左に出る者もないかと！」

（。。*）！？なんとという団結力！

こいつら俺が加奈琉と一緒に登校してることをすっかり妬んでるな……。

中学時代から男子の間で人気のあったらしい俺の幼馴染でもある月城加奈琉。

実は今その加奈琉の家にお世話になっていることもあり、一緒に登校していたのを入学早々クラスの男子に問いただされたことがあったのだ。

「高校生活始まって間もないのに小鳥くんすごい信頼ね！」

先生、それ本気で言ってるなら怒りますよ？

そんな先生の目はきらきらと輝いている。

いや、俺の目に輝くものも見てくださいよ、今にも頬を伝って落ちそうです。

「小鳥くんやってくれる？」

この場合の拒否権ってちゃんと意味を成すのだろうか？

「やってくれません」

とりあえず抵抗の意志を見せてみる。

「いや、やりましょう！」

だが、そんな俺の儂い抵抗は先生の笑顔と共に放たれた一言で一蹴された。

拒否権ってなんだっけ？あとで調べて先生に提出する必要があると思うだ。

てか・・・面倒だよ実行委員！

「災難だったな」

後ろの席からじゅんごが慰めの言葉をかけてくれた。

田之上じゅんご、最初の席決めて偶然近くの席に座ったことから仲良くなつたクラスメイトだ。

「同情するなら代わってくれ」

「いや、俺は忙しいんでな」

ぶうーぶうー。

「実行委員は男子1名、女子1名なの、誰かやってくれるひとは・

」。

そう、ひとりじゃないというのがせめてもの救い。

すでに決定してしまった俺にできること、それはこの窮地から救ってくれる女神の降臨を待つのみ。

「あ、あの・・・小鳥くんがやるなら私やろうかなあ」

その声をかけてくれたのは隣の席にすわっている七瀬陽。

七瀬さんとは小学校の同級生で高校に進学し再会した。

彼女と一緒にできるなら万々歳、雑務だって喜んでこなすぞ。

控えめに手を挙げた七瀬さんに気づいた先生。

「七瀬さん、やってくれる?」

しかし、そこは俺が認めるクラスのアイドル的存在七瀬さん。

そんな抜け駆けまがいの行動許すまじ!

と、男子たちが一斉に動き出した。

「先生!七瀬さんは我々D組のマスコットの存在、クラスの出し物の方で活躍してもらわなくては!」

「実行委員の集まりで帰るのが遅くなったら危ないじゃないですか!それが七瀬さんならなおさらです!」

「七瀬さんと小鳥くんではつり合いません!」

おいっ、最後!

「困ったなあ・・・」

そんな状況を見かねてか、ひとりの生徒が立候補してくれた。

「私やります」

そう言って手を挙げたのは・・・

「白河さん、やってくれるの?」

「このままじゃ決まらないし」

たしか下の名前は・・・乃絵だ。

白河乃絵しろかわのえ、でもたしか委員長じゃなかったっけ？

だが、ここでもまだ抗議をするやつがいた。

「先生！白河さんは副委員長もやってるじゃないですか」

副委員長だったか。

「そうね、両方は大変よね」

そう先生は心配したが、

「別に大丈夫ですから」

と、白河さんは一步も引き下がらなかったので、俺はそのまま白河さんと共に創立祭の実行委員を務めることになった。

七瀬さんが実行委員になるのを阻止できた男子たちはさぞ満足しているだろうと思っていたがそうではなかった。

なぜか、

「がーっ！あそこで白河が立候補してくるとは、なんて運のいいやつ・・・」

と、皆腑に落ちない様子だった。

まさか、俺一人に大役を押し付けるつもりだったんじゃないか。……まさかね。

とりあえず俺はまだあまり言葉を交わしたことはない白河さんと少しでも仲良くならなくては。

立候補してくれたお礼も言わなくちゃね。

scene 7 - 2 多くのことを吸収して、人として成長したいよね

実行委員に任命された俺の初仕事。

実際に創立祭で行うクラスの出し物を決めていく。

創立祭とは何ぞや？

と思うかもしれないが一般に行われている文化祭と大して変わらな
いらしい。

クラスや部活単位、または認められたグループや個人でそれぞれが
思い思いの出し物を考え実行し、仲間との結束を深める。

というのが主な主旨である、らしい。

ある程度の資金は学校側から支給され、その支給額より売り上げが
上回った場合にのみ支給額分を学校側へ返済する。

要は、それ以上の儲けは自分たちのものとなる。

そのため、異様な盛り上がりを見せるイベントでもあるという。

創立祭は中等部と俺たち高等部が共に行うのだが、今年からここへ
通うようになった俺には初めてのイベントだ。

じゃあ、

「うちのクラスは何をやります？意見くださいな」

俺と白河さんは教壇に立った。

「はい」

俺の問いにひとりの男子生徒が手を挙げる。

文化祭での出し物といったらなんだろう、夏祭りに出ている夜店の
ようなもんだよな……。

「はい、じゃあどうぞ」

「断然、メイドカフェ！」

メイドカフェ？

その提案に男子たちから賞賛の声が上がった。

聞いたことあるぞ、たしか……

「いらっしやいませ、ご主人様」ってやつだっけ？

「違う！“お帰りなさいませ”だ！」

ああ、そうなんだ？

「うん、じゃあ白河さんお願い」

白河さんはきれいな字で黒板に書き上げていく。

都会の学校ではそんなことをやるのかあ、ふむふむ。

「でも、メイドカフェじゃ他のクラスとかぶるんじゃないね？」

「そうだな」

なんと！そんなに人気のあるものなのか・・・都会は知らないことばかりだな。

「アニマルカフェとかよくないか？」

なんだ？動物とふれ合える喫茶店かな？

「いや、もう少し攻めていかないといけないと他のクラスとかぶるぞ。水着カフェとかどうだ？」

ミズギカフェ？水着で接客するのか？まさかな。

何かもう勝手に議論が進んでいる、俺いらなくね？

「水着ならエプロンもつけるのが常識だろ！水着エプロンカフェだ」

「「「おおー！！」「」」

教室中で歓声上がる、ただしアルトではなくテノール。

都会の常識がこうもかけ離れていたとは、もっと勉強が必要そうだな、俺ががんばっ！

てか、これ完全に接客する側が水着にエプロンだよな。

「はい、俺水着にエプロンなんて格好で接客したくないです」

そう言うと、クラス中の視線が俺に集まった。

「」「男の水着エプロンなんか誰も見たかねえよ!」「」

なんと息の合ったツツコミ!

「そんな格好私たちだってしたくないに決まってるじゃん!」

「そうよ!」

そして、当然のごとくあがる女子たちからの反論の声。

「んー……じゃ他に案よろしく」

その後も我がD組の教室では熱い議論が繰り広げられたが、結局は一番最初に出た『メイドカフェ』で落ち着いた。

七瀬さん、そして咲坂さんのメイド服姿かあ。

これはもう集客力に期待せざるを得ない。

scene 7 - 3 せめて彼女とはつり合いのとれた男でいたいよね

休日である今日、俺は待ち合わせのために駅に向かっている。

もちろん七瀬さんを選んでもらった俺の愛車で。

今日もペダルがよく回るぜい！

駅前の大通りから外れ、駐輪場に自転車を停める。

ちらりと携帯に目をやると待ち合わせの5分前だった。

小走りで点滅する信号機を通り過ぎる。

すると、待ち合わせの相手はすでにそこに立っていた。

「ごめん待ったー？」

ううん、今来たところ なんちて。

「うん、5分くらい」

相手は同じ創立祭実行委員を務めることになった白河さん。

フードのついたゆったり系のホワイトのブルゾンに、同じくホワイトのVネックニット。

ブラウンのミニスカートの裾はホワイトでひらひらしている。

ブラックのニーソにブラウンのパンプス、胸元は落ち着いたネットレスでさりげなく飾っている。

「うわぁ、白河さんって普段こんな可愛い格好してるんだ？」

白河さんの頬が薄い桜色に染まる。

「べ、別にっ……」

あんたのためじゃないんだから！なんちて。

「……たまによ」

クラスの出し物の買出しだからってなめてたな、なんて哀れな少年もとい俺。

「俺ももう少しオシャレしてくれば良かったなあ」

「そうね、せめて制服以外で来てほしかったかな」

だって、学校の用事っていったら制服着ていくのがスジだと思ったんだもん！

制服のズボンにYシャツ、上にカーディガンを羽織ってきただけの格好。

白河さんとつり合いが取れていないことこの上ない。

こんなアンバランスじゃ、公園のシーソーだってうんともすんとも言わない。

「まあ、たくさんまわらなくちゃいけないから早くいきましょ」

「あ、うん」

歩き出した白河さんの斜め後ろをついて歩く。

。。。。。

「小鳥君」

「なに？ついたの？」

俺はまだこのあたりの店についてはあまり詳しくない、だから買い物をする場所については彼女に一任している。

「。。。なんでちょっと後ろからついてくるの？。。。隣歩いてよ」

なんでってそりゃ店の場所を知らないってのもあるけど、

「いや、制服のやつと並んで歩きたくないでしょ」

「そんなこと！別にいいし。。。気にしすぎ」

そう言っただけでスタスタと先を歩いていく。

たしかに、逆ならともかく男が女のあとついて歩くとか尾行を趣味にしてる人じゃないんだから。

追いついて彼女の隣を歩く。

「ごめんね、白河さん」

「別に怒ってないから」

ちょっと怒ってるよね？こっちみてくれないし。

「そ、そうだ！この間ありがとうね」

「え？なんのこと？」

「創立祭の実行委員がなかなか決まらないときに、立候補してください。あーえっと、もちろん俺の為だとかそんなおこがましいこと思ってるわけじゃなくて、ただあのままだったらひとりで実行委員やることになってたかもって」

そんなこと言いつつ1%でも自分のためって理由で動いてくれていたら嬉しかったとほんのり思ったり思わなかったり。

「あ・・・うん、でも実行委員は男女一名ずつって決まってたからそれはないんじゃない？」

「そ、そっか」

scene 7 - 4 過ぎたことを悔やんでもしょうがないよね

大体の買出しを終えた俺の両手は完全にふさがっている。

持ち手の紐が千切れんばかりの重さ、こんな女の子に持たせるわけにはいかん！という俺のいつ登場したかもわからない謎のプライドで左右に1つずつ。

「でも小鳥くん、なんで中等部出の男子からあんな・・・」

敵対心持たれているか？

「白河さんもたしか天ノ宮中の方から高校に進学したんだよね？」

「うん、そうだけど」

「じゃあ加奈琉のことわかるかな？」

「月城さん？」

「そうそう、あいつ相当男子から人気あったみたいで、一緒に登校してるの見られたらなんでお前がー！ってね」

「そーだったんだあ」

なんとなく打ち解けてきたような気がするぞ！

ここで俺は調子に乗ってたたみかける。

「うん、幼馴染でね、今は加奈琉の家に居候させてもらってるんだ・
・・あ」

少しでも白河さんと仲良くなりたいたいと思うあまり余計なことまで話
してしまった。

小鳥幸太郎、気持ち先走るあまりの軽率な行動、圧倒的失敗！

「そそそそうなんだ？へ、へー・・・いいんじゃない？べ、別に、
私には関係ないし」

白河さんもとまどっている。

「あー・・・白河さん、こ、このことはどうか内密にお願いします、
特にクラスの男子には。俺、まだ死にたくないんで」

自ら弱みを握らせるとは・・・やってしまった。

これでこのことを知ってるのは新聞部の浅倉さんと白河さんのふた
り。

・・・浅倉さんが誰にも言ってなければの話だけど。

・
・
・
・
・
・

沈黙が怖い、これをネタに脅されるかもしれない・・・。

「もしかして・・・」

しばらくして白河さんが口を開いた。

「もしかして、このこと知ってるのって私だけだったり・・・」

「いや、どうしてか浅倉さんにも知られてて」

ほとんどどこから情報仕入れたんだらう？

「クレープおごって」

「え？」

「あそこのお店のクレープ、おごってくれたら黙っててあげる」

くっ・・・クレープひとつで俺の平穩が保たれるなら、

「わかったよ、それで手を打とう」

「決まりね！」

「それじゃ俺、両手ふさがってるから白河さん好きなの買ってきなよ、俺の財布ズボンのポケットに入ってるからさ」

そう言ってクレープを買いに行ってもらう。

クレープ屋にはそこそこの行列ができていた。

そういえば加奈琉が行きたいって言った駅前に来たクレープ屋ってこれのことか。

しばらくして白河さんが戻ってきた、クレープを両手に持って。

「おまたせー」

「いえいえ・・・2つお召し上がりになるんすか？」

「そ、そんなわけないじゃん！ひとつは小鳥くんのだよ、私ひとりで食べてるのやだもん」

クレープをひとつ差し出してくれる。

この場合両手がふさがっている俺の正解は・・・

「あー」

口を大きく開いてみる。

「ばばばバカじゃない！？自分で食べてよ！」

不正解だったようだ、おとなしく口を閉じる、恥ずかしい。

「だって両手ふさがってるし」

「私がひとつ持つから」

そう言って荷物を受け取る代わりにクレープを渡してくれる。

クレープを食べ終えた後、俺はバスで帰るといって白河さんと別れた。

「ただいまー」

持ち帰った買い物袋をぶら下げてリビング入ると加奈琉と遙さんが紅茶を淹れて飲んでいた。

「お帰りなさい、幸太郎君」

「遙さんただいま」

一旦、買い物袋をリビングの隅に置かせてもらい手を洗っていると加奈琉がいつの間にか近づいてきていた。

「うわっ!」

くんくん、くんくん。

「なに?そんなに匂いかいで」

香水の香りがする・・・女ね!とでも言われるのだろうか。

「甘い香りがする・・・クレープね!」

「すごいな!駅前でクレープ食べてきたんだよ、たぶん加奈琉が行きたいって言ってたところ」

「えーっ!誰と!?!」

「同じクラスの白河さんだけど」

「うー・・・かなるなみだ目」

加奈琉はがっくりと肩を落としている、そんなにクレープ食べたかったのか、買ってきてあげれば良かったかな？

でも、向こうで食べた方がおいしいし今度誘ってみよう。

「あらあら」

後ろのテーブルでは遙さんが微笑んでいた。

scene 7 - 5 たまにはこついった手段も必要だよな

本日晴天、創立祭！

1日目の今日はやることが盛りだくさんだ。

創立祭は2日間に渡って行われるので明日はゆっくりとできるといいなあ。

そんなことを考えつつ、ただいまトラブルがないか構内を見回り中。見回りといってもただだらだらと歩いているだけだね。

問題が起きていないのは良いこと良いこと。

まだ午前中だが創立祭はそれなりの賑わいをみせている。

これからもっと人が増えるのかと思うと少々頭が痛いけど、見回りの担当時間が今というのは良かったのかも。

でも、

「今朝飯食べてないんだよなあ」

良い感じに空腹なところに追い討ちをかけるように焼きそばの香ばしい香りが漂ってきた。

その匂いにつられてふらふら。

「ちょっと!?!」

後ろから声をかけられる、焼きそばが俺を呼んでいるのに。

「なんでしょっ?」

同じく実行委員を務める白河さん。

クラスごとに見回りの時間が決められているので仲良く一緒に見回り中。

「仕事中に焼きそばなんて買おうとしてなかった?」

さすが、クラスの委員長を務めるだけあって真面目だ。

・・・副委員長だっけ?

「いや、うん、してないよ」

にっこりと笑ってごまかす、見逃してくれないのね。

「ならいいけど」

そう言っですたすと先を歩いていく彼女の後を追っていく。

「ねえ、ひとりずつ別々に見回りしない?その方が効率良いしさ)
お腹も満たされるし」

「だめ」

「えー、なんで？」

「だってひとりにしたら見回りサボって遊びに行っちゃいそう」

まだ付き合い浅いのになんでこんなに信用ないの？しょんぼり。

「いや、行かないよ」

俺は焼きそばを食べたいだけだ、なんならたこ焼きだっていい。

「・・・嘘、絶対に月城さんのとこ行くに決まってる」

「え？」

やばい、焼きそばが頭の中の8割を占めてる、そんで1割がたこ焼き。

「気にしないで、独り言だから・・・って聞いている？」

「ん？・・・ああ」

別行動案却下、空腹をこらえながら見回りを続ける。

それぞれの場所を通り過ぎる度に漂ってくる食べ物匂い、おいしそうに頬張る客たち。

あーだめだ、ついつい食べ物を持っている人を目で追ってしまう。

見回りに集中しろ、俺！雑念デリート！

そんなこんなで何とか空腹をごまかしていると前を歩いている白河さんもさつきから度々すれ違う人に気をとられている。

それもよく見てみると食べ物をもっている人ばかりだ。

「なんだあ、白河さんもお腹すいて・・・」

と、言いかけて気がつく。

違う、白河さんが見ていたのは食べ物を持っている人は持っている人でも小さい子を連れて親子で来ている人たちだ。

なるほど。

「ねえねえ、綿菓子好きなの？」

「なに、突然・・・」

立ち止まって振り返る。

「あれ違った？さつきから綿菓子持つてる人をちらちら見てたから」

白河さんは少し顔を赤らめた。

「うそっ！？私そんなにジロジロ見てた？」

「うーん、いやジロジロってほどじゃないけどちらちらと」

綿菓子が好きとか・・・可愛いな。

「あ、なに？今のニヤって、バカにしてるでしょ!？」

うわ、顔に出てたか。

「いやいや、綿菓子とか可愛いなと思ったただだよ」

「ほほほらっ！バカにしてんじゃん!」

え？バカにするようなこと言った？

「あーそんなつもりないんだけど・・・はいこれ」

綿菓子の入った袋を手渡す。

「え、なんで？ていうか、いつの間に」

さっき耐え切れなくなって焼きそばと一緒に。

まあいわゆる賄賂っす。

「どうぞ、お納めくださいませ」

そうして俺は焼きそばを食べはじめる。

う、うまい！

「ちよっと！まだ、見回り中・・・」

「いいじゃん、もう少しで交代の時間なんだし」

白河さんは綿菓子わたあめの袋と俺の顔を見比べている。

「し、しょうがないなあ、これはもらっとく」

「ふうー、ごちそうさまー」

食べ終わるとちょうど交代の時間になった。

ごみを捨てて戻る、白河さんは綿菓子わたあめの袋を大事そうに抱えていた。

結局、見回りの仕事しごと中は綿菓子わたあめに手をつけなかったところが、律儀りきぎといふかなんというか。

「小鳥くんクラスの仕事の方は私と同じグループだね？」

「うん、そうそう」

「あのおあ……この後ってどうするの？」

この後は演劇部の公演があるんだけど……何時からだっけ？

「えっと、たしか……」

「コウちゃん！」

名前を呼ばれた方を振り返ると、加奈琉かなるうが小走りこぞりで近づいてくる。

「早くしないと公演始まるよ！」

加奈琉に腕を掴まれる。

「あれ？こんな早い時間だったっけ？」

「早く行つていい席とらなきゃ、それじゃ白河さん、コウちゃん借りてくね！」

「え、あ、うん、どうぞ」

「行くよっ！」

そう言つて加奈琉は俺の腕を、痛っ！

「引っ張るのはいいけど、捻るのはやめて！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4275i/>

かなるえんかうんたー

2010年10月8日21時50分発行